

幼児の教育 第116巻 第2号 平成29年4月1日発行 ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育の「根本考察」にチャレンジ!

「いゝ子」の今を再考する

[実践] 地域で育てる

クロモンこども食堂

[保育エッセイ] 保育における二人称的アプローチ

「二人称的アプローチ」とは

第116巻 第2号 日本幼稚園協会

春 2017

since 1901

保育ナビブック ※ 第4弾! ※保育ナビ(月刊保育誌)から生まれた新シリーズ。保育現場で気になるテーマをしっかりと掘り下げます。

私たちの まちの園になる

～地域と共にある園をつくる～

私たちの まちの園になる

～地域と共にある園をつくる～

秋田喜代美 (東京大学大学院)
松本理寿輝 (まちの保育園 代表)

園と地域のつながりを
深めるために
大切なことがわかる
園長の言葉、園師の工夫、
実務事例を具体的に紹介

園と地域の
よりよい関係
つくりの
ために

今後、園・保育施設は、地域コミュニティにおける子育て全般の担い手になることが求められます。子ども、保護者、地域を巻き込みながら、「まち」の中心にある園になるための取り組みを、具体的に紹介します。

共著：秋田喜代美(東京大学大学院) 松本理寿輝(まちの保育園代表)
まちの保育園

全 80 ページ 26×18cm
定価 本体 1,800 円＋税
109-55 ISBN978-4-577-81406-2

施設の様子や、そこで働く職員たちの声、取り組み内容を具体的に紹介!

4 カフェ
園児や保護者だけでなく、園の中を歩くと見られる人々のための、こころに寄り添った空間を創ります。

「まちのバーラー」
園児や保護者だけでなく、園の中を歩くと見られる人々のための、こころに寄り添った空間を創ります。

「まちの木のサウンドイッチ」
園児や保護者だけでなく、園の中を歩くと見られる人々のための、こころに寄り添った空間を創ります。

**1 「まちの保育園 小竹向原」
箱物のプロジェクト**
園児や保護者だけでなく、園の中を歩くと見られる人々のための、こころに寄り添った空間を創ります。

遊具への挑戦が広がる
園児や保護者だけでなく、園の中を歩くと見られる人々のための、こころに寄り添った空間を創ります。

草履と足置も作っていました
園児や保護者だけでなく、園の中を歩くと見られる人々のための、こころに寄り添った空間を創ります。

CONTENTS (一部抜粋)

※画像、内容は変更になる場合があります。

- 第1章 暮らしの場をデザインする
- 第2章 子どもたちを育む人々
- 第3章 子どもたちにとっての「まち」の役割

- 第4章 地域と園のあり方を探る(座談会1)
- 第5章 園にとって「まち」とは? 「まち」にとって園とは?(座談会2)



なにかいる？

そーっと見てみよう

子どもの情景

写真

子どもの情景 1

目次 まじり

けなげさと「いい子」 2

特集

保育の「根本考察」にチャレンジ！ 1

「いゝ子」の今を再考する 4

《座談会 2017》

現代版「いい子を語る」 5

《アーカイブズ》

「いゝ子を語る」(幼稚園座談会)

―『幼児の教育』第三十二巻第一号から― 13

《私はこう読む》

「いゝ子」を語りあう 幸せな先生たち

荒井 冽 18

実践

地域で育てる

クロモンこども食堂 灰谷知子 22

私の保育ノート

世界にたったひとつの絵本 栗原玲子 26

こども園をつくる

―文京区立お茶の水女子大学こども園の記録― Vol.4

「食」が保育の中心にある生活

私市和子・川島雅子・佐藤瑤子 30

連載

保育における二人称的アプローチ ①

「二人称的アプローチ」とは

佐伯 胖 36

倉橋惣三との対話 ①

「根本考察」とはどんなものですか

浜口 順子 40

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
スタンドグラスの模様をデザイン化したものです。

文化

園文化をデザインする ①

自然の素材を生かしたおもちゃ 中村絃子

44

絵本だいすき!

子どもたちと楽しむ絵本との出会い

大田利歌子

46

海外の保育・日本の保育

韓国から見た日本の保育 林志妍

50

論考

保育はみんなでつくるもの

— ある日の登園から 西 隆太郎

54

報告

学生が「就学前の乳幼児の成育環境デザイン」

を考え抜いた八日間 渡辺隼伍

58

子どもの学びのこころ

イベント・メディア情報・

読者投稿・編集後記 他

63

けなげさと「いい子」

まど

また春号が巡ってきた。特集を模様替えし、座談会をさせていただいた。テーマは「いい子」。いろいろな「いい子」がいるけれど、先日幼稚園で出会ったこの子どもはなんとなく印象深く、一言で言えば「けなげさ」がいいと思ったのだと思う。

ある朝、私が幼稚園の廊下で観察を始める時、「今日はアトリエ室でお汁粉作りです」とX副園長が教えてくださった。X先生と私がひとしきり立ち話をしていると、一番乗りで準備に駆けつけた三角巾姿の年長組男児Aが、私たち大人二人の前で話しかけたそうにもぞもぞしている。X先生はすぐに応答しない。その間にAはアトリエ室の中に消えたが、X先生は私との話を終えることなくアトリエ室に入って、「よあ何から始めよう」と声をかけた。

お汁粉溶かし、餅焼き、配膳などに取り組む年長児の数は小一時間ほどでみるみる増えた。「あまおいおいおしるこ」と子どもの字で墨書きされた長半紙の看板の下、廊下には待合の椅子が並べられ、年少組の子どもたちがうれしそうに腰かける。その前でAが、おどけた動きをしては二つ年下の弟妹たちを笑わせている。Aのうれしいうお汁粉の宴である。心の中でAに声援を送った。(H)

特集

保育の「根本考察」

にチャレンジ！ 1

今から約1世紀前、倉橋惣三が本誌にこう書いた。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉の處で動いて居る。(中略)——我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々々過ぎて居るのではあるまいか。」(「斯くてまた暮れゆく」大正5年12月)…… 倉橋がもし今生きていたら、現代の幼児教育界をどう見るだろう。倉橋先生、私たち根本考察できていますか？

「いゝ子」の今を 再考する

85年前の本誌で「いゝ子を語る」という座談会がありました。今、同じテーマで座談会をやったらどうなるかなとやってみました。どうでしょう、変わった？ 変わっていない？ 今回は、保育者による子どもの評価を考えます。

CONTENTS

座談会 2017

現代版「いい子を語る」

アーカイブズ

「いゝ子を語る」(幼稚園座談会)

— 『幼児の教育』 第32巻第1号(1932年) から —

私はこう読む 荒井 冽氏

「いゝ子」を語りあう 幸せな先生たち

現代版「いい子を語る」

浜口順子
宮里曉美
伊集院理子
佐藤寛子
伊藤綾子

昔の座談会を読んで

浜口 今から八十年以上前の『幼児の教育』に、倉橋惣三と幼稚園の先生たちの「いゝ子を語る」という座談会の様子が掲載されています（この後の13〜17ページに一部転載）。今日は、現代版「いい子を語る」座談会を私たちがやってみようと思います。ちょっとおこがましいようですが。

伊藤 「思ひやり」っていう言葉が昔の座談会に出てきますが、「いい子」というと、イメ

ージとしてはやっぱり優しいとか、周りの人にも思いやりがある、いろいろな声をかけていくとか、そういうところがあるのかなあ。どうですか？

佐藤 私はこれを読んだとき、保育が終わった後などに私たちが話している感じとそんなに違わないような気がしました。目に見える姿ではなくて、もうちょっと先まで考えて、「この子はこれからどうやって育っていくだろう？」「どうかかわっていいこう？」と考えつつ子どもを語ろうとするところが似ているなあ。

伊集院 ちょうど神原先生が「いゝ子って主観になりますね。少し乱暴だと見る人もありますが、それは元気の余る所と私は思ひます」とおっしゃっている。やっぱりいろいろな見方をしてその子の良さを見取ろうとしている感じが伝わってきて、そういう意味では、今と近いものがあるなあ。

浜口順子（お茶の水女子大学教授）
伊集院理子（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）
伊藤綾子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）

宮里曉美（文京区立お茶の水女子大学こども園園長）
佐藤寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）

宮里 倉橋先生が先生たちに「さういふい、子はみんなからどうです」と尋ねていて、徳久先生が「好かれて居ります」と答える。それに対して倉橋先生が「同年齢の子の中で認識尊敬してゆく力はあるものです」と。

「い、子」を語っているようでいて、その子を認めている周りの子の良さを語る方向へ持っていくところがすごいなあと思う。関係の良さや幅広さを語っている。一面的にならない、深い語りになっているのね。

「い、子」の語り方

浜口 「い、子を語る」なんてタイトル、現代の雑誌だと絶対ないと思います。「気になる子について語る」とかはあるかもしれないけれど。語りにくいテーマではありませんか。

伊集院 誰ちゃん、っていうのではなくて、私たちは、こういう姿があつてそういうところがいいよねってという語り方。例えば、お片

づけのときに、先生に言われなくても黙々と一人でもやっているとか、自分から自然にそういうことをいとわずにやっている子を見ると、この子はいいい子だなと思ったりする。すごく一生懸命遊んで、自分のことも一生懸命だけど、はっとお友達のことを気がついて声をかけてあげるとか、そんな姿から、この子にはこういう面があつていい子だなんて思う感じかな。どうですか。

佐藤 身体が健康な人の話題が出てきましたよね。健やかであることって、それがいいとか悪いとかではなく、安心する。ああこの人、大丈夫だなんて思えるというか。例えば今年長兄は、「お祭り」に向けて学年で準備を進めているんだけど、やらされているのではなくて、心が動いたり身体があつと動いたりする人って、いいなあつて感じたりする。そうではない人には、こちらがもう少しかわらないといけないのかなとか、この子は今そう



できない何かがあるのかなとか、まだ安心できないようなものを感じる。いい悪いっていう評価的な捉え方はあまりしていないですね。宮里 今日二歳児が、これから散歩に出かけようというときに私のそばに来て、「ひとりでいくの」と言ってきた。「ひとりで」という言葉がうれしい言葉で、宣言のように言っていた。大きくなった自分を実感している感じがして、いいなと思った。保育者は「いい子ね」って評価的なことはあまり言わないようにしている。「片づいてきれいになったね」とか「そこ気がついたんだ」とかは言うけど、「いい子にしよう」とは言わないところに、大事な意味があるような気がする。

伊集院 決して「いい子だね」とは言わないですね。

宮里 「いい子だな」とは思っても、その子に「いい子ね」とはあまり言わない。

浜口 その子には言わないけれど、例えば自分のお子さんの良さを認めにくい親御さんなんかには言うかもしれません。

伊集院 そうね。そういうことはあるかもしれない。こういうところがいいところですね、って、できるだけいいところについて伝えようと心がけていますね。

佐藤 それでも、やはり「いい子」とは言わないかしらね。

宮里 「悪い」が対極にある。

佐藤 などで「子」を付けると変な感じになるのかしら。やっぱり、「いい子」ってしたときには大人の評価が入るのかな。

伊藤 そうなっってほしい、という思いがあるような気がします。

佐藤 今日、ある子がお弁当を派手にひっくり返しちゃったんです。ひっくり返したのが

シヨックだったから、スツとは部屋で座れず
に、遊戯室に一人で行ってしまった。それで
みんな待ってたんです。「きつとがっかりし
ちゃったのね、戻ってきたらどうしようか」
って周りの子どもたちと言ったら、「そつとし
といてあげよう」って。お友達の今困ってい
る状況がわかっていて、そつと見守る感じが
あって。いいな、すごいなあと思いました。

遊戯室は今、お祭りの準備でいろいろなお
店が並んでいるんですが、当の本人は、お菓
子屋さんの所にちよこんと座って、ケーキを
作っていました。そこで一生懸命自分を立て
直そうとしていて……。嫌なことがあると、
みんなから外れていき、気持ちを一緒に立て
直すところに誰かがつき合ってくれないと戻
ってこられる人じゃなかった。そういう、ち
よつと困ったときも、自分を立て直すことが

できるようになってきて、この人いいなって
思っただすよね。

子どもは「つづみ」にならたい

浜口 もともと子どもって、一人ひとりみん
ない子になろうとしていない？

伊集院 してる。すごくしてる。けなげなく
らいしているんですよね。

浜口 わるい子になろうなんて子、いないん
じゃないかしら。結果的にそうなっても。

佐藤 きつとね。うまくいかなくて、いっぱ
い挫折しているんでしょうね。ところで、子
どもたちが思っている「いい子」っていうの
は、どういふのなんでしょう。

浜口 観察で最近会ったY君（三歳児）は、
いざござが起こりやすい子。つい手が出て友
達をたたいたりしてしまう。女の子ばかりと
ままごととして、急に警察官なんかになって、
「よし、迷子を助けに行こう」とかパトロー

ルしたりする。いい子になろうとしているんだなあと思う。でも、周りの子どもと全然かみ合っていないの。面白い、あの子。

伊集院 いろいろ問題を起こす子はいっぱいいるけれど、「困った子だ」「わるい子なんだ」なんていうのは、先生たちは本当に思っていない。今「面白い」って言ったでしょう。ここに面白さっていうか個性があつて、伸ばしてあげたいってみんな思つて、かかわつていないのではないかしら。

宮里 昔の座談会に、大人が思う「いゝ子」とリーダーについて書いてある（本誌16〜17ページに転載）。大人の感じ方と子ども同士の感じ方では違うという指摘がとても面白い。いゝ子という考え方自体を疑いながら語っている感じがとつてもする箇所ですよ。菊池先生は「私の方のは、始めはそれ程いゝ子とは思ひませんでした」と言い切っちゃう。リーダーは「いゝ子」ではないという子どもの

社会を認める教育観が大事なんだと思う。

「大人が見てリーダーと思はれる人必ずしも子供の中のリーダーにはなれません」というこの一文、どう思いますか？

浜口 小学校とか中学校で、リーダー的な子どもを見つけて、その子を中心にクラスをつくっていくっていう場合もあるようです。

佐藤 私たちも聞かれますよね。「リーダーは誰ですか？」って。とても困るんです。

浜口 そういうことはあまり考えてない？

伊集院 幼稚園の中ではね。この子をリーダーに育てようとか、この子をリーダーに育ててその子を中心にまとめていこうとか、そういう考え方はしないから。

一人ひとりの良さ

宮里 T君っていう、野球やサッカーなどのスポーツは万能だけれど、生き物が苦手な子がいきましたよね。

伊集院 そうなの。園生活最後の上野動物園の遠足のときにね、いつもはスポーツ万能でかっこいいT君が、人目をはばからず鼻にね、ティッシュを詰めて。

宮里 自分のいいところというか得意な面、強い立派な部分も出しているけれど、弱いほうの自分も安心して出していた。弱点のあるリーダーだった気がする。

伊集院 強がつていられなかったんですよ。

宮里 その子そのまま、情けない自分も出していた。いい子だけを求めない保育の中だと、弱い自分を安心して出せるのかなと思った。T君みたいなあり方を先生たちが大事にしていたように思う。

佐藤 そうですねえ。虫のことだったらH君とか、スポーツだったらT君みたいな、それをリーダーっていうのかはわからないけれど、その人がいることでみんなも楽しくなるし、まとまってくるような人はいますよね。総合

的にどうかつていうとわからないけれど……。だから、リーダーっていうのは総合的だなかなか難しい。

宮里 総合的な人はつまらない。特色がないし。ダメだと思う。

伊集院 なんかやつぱりこのことに没頭する、つていう、そういうところが。

浜口 特徴がないつてこと？ 総合的つていうのは。

伊集院 人からどう評価されるかを気にしてバランスをとっているような。昔の座談会でもね、い、子を語るときに、「遊びに没入して居ります」つて。それをいいつて、話していただきましたね。

大人の評価との関係

宮里 評価の視点つて大事よね。何をいいと思つているかによつて、子どもの動きが変わつてしまうように思う。

佐藤 子どもたちはそういうのをお互いよく

見ていますね。弱い部分があったりしても、

「この人のこういうところは、自分にはない。

すごいなあ」って認めてしまうところが、子

ども同士の関係にはある。大人は、できてい

ないことをとやかく言うことが多いけれど。

子どもって、できないことがいっぱいあるか

ら、できていることに対してすごいなって素

直に思うのかな。

伊集院 そういうところ、あるかもね。

浜口 それって、あまり先生方が評価しない

からだと思う。

佐藤 あー。そういう生活だから？

浜口 先生の評価があると、子どもが先生の

目で見てしまうときがあるじゃない。あの子

はだめだ、みたいなの。だから、子どもって、

子どもに任せておくとかなりそういう力を発

揮するけれど、「いい悪い」の評価が先んじる

と難しいのかなって。

伊集院 まあ、どの子にも自分を發揮してほ

しいと思つて保育していますからね。

伊藤 運動会のとくに、「明日、玉入れやるよ」

つて言つたら、「みんなで頑張ろうっていう気

持ちでやるといいよね」ということを言った

子がいたんです。その子は隣のクラスの子と

遊ぶことも多かつたので、この子も「このク

ラスで、みんなでやりたい」って思つて言葉

にするんだなあ、そういう姿がいいなあって

思つたことがあります。

浜口 助けられるのね、先生が。

佐藤 でも、そこはちよつと微妙。なんてい

うのかなあ。例えば片づけも、一生懸命やっ

てくれて「その人の気持ちがいい」って

いうのもあるけれど、実際「先生が助かる」

つていうのもあるじゃないですか。そういう

場合は、やっぱり評価的になりますよね。

浜口 そういう「助かる」もありますか。

伊集院 私もさつき話題に出したけれど、評

価値的ではなくて、けなげな姿に、「は、こう
いうところがあるんだ」っていうのだったの
ね、Mちゃんは。この人、本当に目立たない
けれど、こういうふうにやってるんだなあっ
て思ってた。

佐藤 やってますよね。先生が片づけてほし
いと思ってるのを見て、だから動いている
というのではないものね、Mちゃんは。

伊集院 ではないのよ。

佐藤 でもその微妙な違いってどういうこと
なんでしょうね。同じ「片づけてる」って現
象だけではそういうふうには言えないですよ
ね。Mちゃんのそこだけ見ているわけではな
くて、彼女の生き生きと遊んでいる姿とか、
すごく意欲的にいろんなことをやる人だから、
という全体性を見ていると思うんですよね。
浜口 やっぱり効果をねらってやる子もいる
わけ？ 先生にほめてもらいたいとか。

伊集院 います。

佐藤 います。片づけになると張り切る子も。
伊集院 そう、それも悪くはないけれど。

宮里 片づけはさっさとやるのがいいことだ
と思ってる、そういう遊び方しかなかった子
が、「もう片づけなんか嫌だ、もっと遊びたい
んだ」っていうふうになったら、「ああよかつ
た」って思う。片づけになると張り切ってく
れる子に「ありがとう」って言いつつ、片づ
けだけが生きがいの人生じゃまずいんじゃない
かと思ったりもする。だからといって、そ
の子に対して、片づけさえほめてあげないと
したら……。

佐藤 もう何もなくなっちゃう。

宮里 もう何もなくなっちゃうから、私は「本
当に助かる。ありがとう」って言う。

伊集院・佐藤・伊藤・浜口 言う。そうよね。

(二〇一六年十月三十一日)

「い、子を語る」（幼稚園座談会）

— 『幼児の教育』第三十二巻第一号

（一九三二年）から—

倉橋惣三、及川ふみ、新庄よしこ、

菊池ふじの、神原きく、徳久孝子、

村上露子、小島その

倉橋 今日、「組のい、子供」の話をしませう。い、子供なら七福神どころか八福神くらいはありませうね。まづ始めに、及川さん、どうです。

及川 さあ、誰にさせよう。たんとあつて。小島さんいかゞ、丁さんはい、子だと思ふけど。

小島 本当にさうで御座いますね。

倉橋 男の子ですね。

小島 朝などおへやに入つて来て、「お早やう」つて丁寧におじぎをします。

及川 仕事にねばりがとてもあります。

倉橋 そのねばり強いつていふのは他の組にもありますか。

新庄 御座います。

及川 体もいゝし、運動もよくするし、

倉橋 ねばり強いとは仕事を根気よくすることですか。

及川 それだけでなく、誰かゞ仕事をやつて居るから仕事をするといふのでなく、他ひとには関はず又やたらに他から動かされないで一生懸命にすることです。仕事の途中でフーツと消えて行くことはありません。割合子供には途中で消えて行くことが多いんですけど。仕事も道具も出し放しで行く子がね。

（中略）

新庄 私の方、今のところあんまりみんないゝ子で、一人だけ取り出せませんわ。組を大体二つに分ければ、女の子の方が、余りいゝとは思はれません。男の子の方は誰とは言へ

ぬ程よろしいのですが、一人の子供でなくてもよろしく御座いませうか。

倉橋 でも仮りに、具体的に誰の様なといへば……。

新庄 今の組では同じやうによい所をもつ子が多いので一人をぬき出すことは、一寸、出来かねますが、ずっと以前から思ひやりがあるかないかを調べて見たんですけど、思ひやりの気持をみんなが、相当に持つて居るのが分りましたの。Tは思ひやりのこゝろをかばふと云つた方が強いものですから、一寸思ひやりの例には変ですけど、あの子は外の子がいぢめられたり、泣いたりして居ると飛んでいつて助けます。思ひやりが度を過ぎるせいか、それでその相手方をいぢめてしまふので皆から暴君の様に思はれてゐるのです。

倉橋 まあ、あれですか、正義心義侠心の侠客のような

新庄 さうでせうね。ちつとも不断は目立ち

ませんが、何か、一人で出来ないような子供に、「してあげませうね」つて言つたり、紙などない時には自分のをやつたりしますの。

倉橋 男の子は案外やさしいものでせう。僕の如く(笑)

及川 先生に感化されたのでせうか。

(中略)

村上 男児のSさん、本当に子供らしいといふので一番いい子と思ふのですけど。とても気持がやさしいんですの。例へば朝なんか小鳥の居た時など「小鳥ちゃんお早やう」と一人で話して居りますの。お昼食前ひるに私がお掃除してますと、僕ジヨロ持つて来てあげるとか、ゴミを拾つてくれるとかよく手伝つて呉れます。一寸見ると乱暴です。口重で何とか口で弁解出来ない時は手が出ます。深く見て居れば皆さんいゝ子だといひます。

(中略)

徳久 Mですが、頭もしっかりして居ります。

出来上る迄一生懸命に仕事をやります。全体に真面目で、決してフザけない。遊ぶ時は元気で。少し気が弱いのでやないかと思ひますが、気持が従順でやさしいのです。

倉橋 さういふいゝ子はみんなからどうです。

徳久 好かれて居ります。

倉橋 同年齢の子の中で認識尊敬してゆく力はあるものですね。

徳久 仕事も出来るので認められて居ります。今一人、Hですが、能力は今の所特に秀でて居ると思はれませんが、気持が非常に明るくて人なつつこくて、

(中略)

神原 私の組のいゝ子、又男の子ですが、及川 ほんとよ、ぴつたり合ふのは男の子ですね。

倉橋 エヘン、ところで——。(主事大いに威張る)

新庄 おやく

及川 いえゝ男ぢやありませんよ、男の子ですよ。(笑)

神原 いゝ子つて主観になりますね。少し乱暴だと思ひますが、それは元気の余る所と私は思ひます。Kなのですが、能力の方は非常によろしいのです。自分で遊びや製作をやり出すのが得意ですが、みんなと一緒に遊べますから、何時でも愉快に過して居ります。

倉橋 人にやさしくしますか。

神原 特別に、やさしい所つて見ませんけど……。不断ちよいゝ人をかまひますが、よく強がりの子が他の子にやるのとは違つて、軽い意味のフザケだと思ひます。楽しく生活して居るといふ点からいゝ子ではないかと思ひます。

倉橋 さういふ子もあるでせうね。自分が不愉快にして居れば他人も不愉快でせうからね。こんどは菊池さん。

菊池 やつぱり男の子ですが、人との関係では、やさしみデリケートだとは思ひませんが、とてもよく遊びます。さつぱりした子です。仕事の方はもつと他によくする子が居りますが、遊びに没入して居ります。人とつき合ふ時コマ／＼と告げ口や干渉はいたしません――、

(中略)

及川 い、子は、みんな健康ですね。

新庄 さうですよ、丁ちゃん、林橋は一時に二つ、バナナは三本位いたゞきますのよ。

倉橋 だからアップレアップレ(アップルアップル)二つ言はなくちや。(笑)

菊池 ご飯をすつかり食べます。

倉橋 矢張り、性情がいゝつていふのは内臓からいゝんですね。人格といったつて胃腸格もいゝんですね。

(中略)

倉橋 組にリーダーが居りませう。一人か二人か。そのリーダーシップと今の子との関係

はどうですか。

及川、菊池 リーダーになりませんわ。

倉橋 リーダーは他に居るわけですね。先生のいゝと思ふ子必ずしもリーダーでない。

徳久 リーダーになる人は暴君のようですね。

菊池 私の方のリーダーはIさんですが、人がよくて立てられて居りますわ。

村上 及川先生の方はリーダーはKさんですね。

及川 遊ぶ時になると、Kの様な小さい子にみんなヒヨコ／＼従つて居ります。何んなわけかと思ひましたが、大きい組になつて、テスト式にやつて見ました所が、実力もあるのです、只遊ぶ時だけの大将ではないのです。

倉橋 此前の座談会注の幼児の社会生活問題から研究的につゞくのはリーダーの問題です。これは直接にはその子の問題といふよりもこの年齢に於ける人物批判の標準といふもの、研究ですね。アメリカで大統領になれる人が、

南洋で大統領になれるかどうか分りません。大人が見てリーダーと思はれる人必ずしも子供のの中のリーダーにはなれません。前の大人の見たい、子がリーダーになつて居ないのは、子供の低級観だけでないかも知れません。大人には見付からんものがあるかも知れません。ところで、そのいゝ子供は段々に判つて来るのでせうが、幼稚園に入った時から持つて来るんですね。

及川 さうで御座いますよ。

倉橋 遺憾ながら及川先生の教育力が入つてはゐないのですか。(笑)

菊池 私の方のは、始めはそれ程いゝ子とは思ひませんでした。

新庄 私の方の一人の子が、夏休み迄は何かがつきりしなくてお母さんも心配して居りましたが、二学期頃からぐつとよくなりまりました。今迄は、これで小学校へもうまく行かれるかと心配して居りましたのに。気がついた

始は大変に動作が乱暴になつたといふ事に気が附きました。元気が出たなと思ふうちに、ぐつと仕事が変わつて来ました。

倉橋 さういふ変化はまゝある事ですか。

及川 ありますね。或る時期にすつと伸びます。

新庄 どうしてその子だけさうなつたのか不思議なんですけど。

及川 大きい組になるとすつと伸びて来ます。

倉橋 上級生ですね。そこらに、そんな時期があるのかも分りませんね、青年期になる前に発達がジャンプしたりするように。これに幼稚園にはいつて悪い方になるといふやうな子は無いものですかね、

新庄 それはわるくならないようにしよつちう気をつけて来たからぢやないでせうか。

倉橋 恐れいりました。(笑)

注 『幼児の教育』第三十一卷第十二号(一九三二年)掲載

*旧漢字を新漢字に直した以外は原文のまま掲載しています。

私はこう
読む

「いゝ子」を語りあう 幸せな先生たち

荒井 冽
(大学教員)

「いゝ子を語る」という幸せなテーマ

「いゝ子を語る」というタイトルでの座談会についてコメントをとの依頼を受けて、その座談会が行われた年代を計算してみると、なんと一九三一（昭和六）年であることがわかった。今年から数えてみると八十六年前になるのだが、とすると当時の園児たちは、ご健在ならば九十の峠を越えたことになる。

したがって座談会で語りあっている園のスタッフの方々は、どなたも明治生まれのほずである。しかも勤務先は東京の山の手、女子

高等師範の附属の園。言葉遣いのなんとお上品なこと。それぞれの発言の語尾を挙げてみると、「ですの」「しますの」「分りましたの」「言いますわ」「申せません」「出来かねます」「御座いましょうか」などなど。とにかく、お上品の上もない。

ここで、ちょっと押さえておきたいデータがある。それは一九三一（昭和六）年当時の、五歳児（年長児）の就園率なのだが、それは日本全国を分母に置いて、わずか5.4%に過ぎなかった。（文部省『幼稚園教育百年史』による）ということは、東京などの大都市や地

荒井 冽（あらい きよし）

白鷗大学名誉教授。1939年、福島県郡山市生まれ。
著書：「倉橋惣三 保育へのロマン」（フレーベル館）、
「保育者のための50のキーワード」（明治図書）ほか。

方の有力な町などに住み、かつ余裕のある家庭の子どもたちが、おおむね当時の園児だったと考えられる。

ちなみに、その頃の東北地方は、不景気や農業の不作などによる困窮ぶりはひどいもので、そのために、小学校に通う欠食児童を対象に文字どおりの「給食」が施されたりした。これが第二次世界大戦直後から開始され現在に至る「学校給食」につながることになる。

先生たちにとっては、どんな子が「いゝ子」だったのだろうか

さて、この座談会は園長たる倉橋惣三が司会をして、園のスタッフ七名がこもごも発言をしているのだが、それらの発言ではどんなタイプの子を「いゝ子」として捉えているのか、文面から拾い出してみよう。

○朝などおへやに入つて来て、「お早やう」つて丁寧におじぎをする。

○仕事にねばりがとてもある。

○誰かが仕事をやって居るから仕事をするといふのでなく、他から動かされないで一生懸命にする。

○外の子がいぢめられたり、泣いたりして居ると飛んでいって助ける。

○男児のSさん、本当に子供らしいといふので一番いい子と思ふ。……僕ジョロ持つて来てあげるとか、ゴミを拾ってくれるとかよく手伝つて呉れる。

○頭もしっかりして居り、出来上る迄一生懸命に仕事をやる。

○気持が非常に明るくて人なつっこい。

○遊びに没入して、人とき合ふ時コマ〜と告げ口や干渉はしない。 などなど。

ここで話は少々ずれるのだが、スタッフの発言の中に「仕事」という言葉がしばしば出てくる。楽しいっぱいの園生活の中に、大社会での用語である「仕事」という言葉が

登場するのが妙である。

しかし、これは英和辞典の“work”の項の日本語訳として最初に示されているもので、その次に示されている「課業」のほうが意味内容としては適切である。

蛇足ながら、入園して他の子どもたちと一緒にになって楽しむ遊びを、当時は「社会的遊戯」などと表現していたのだが、これも日本語としての確な遣い方とは言えない。

ひとクラスにかなりの人数の子どもを抱え、保育案に沿っての一斉保育を旨とするならば、与えられた「仕事」（課業あるいは課題）を素直にこなしていつてくれる子は、保育者にとって「いゝ子」と受け取られるのもむべなるかな（もつともなことよ）である。

それはとにかく、「いゝ子」として示された具体例についてのご感想はいかがだろう。「いゝ子」と認定された幸せな子どもたち、「いゝ子」に恵まれた幸せな先生方、そしてこ

のような子どもたちやスタッフに囲まれた幸せな園長先生ではある。

子どもたちに「いゝ子」以外はない

人生の流れの中で価値のない時期はない、と私は思うのだが、同様に、子どもたちには「いゝ子」以外はない、と考えたい。子どもは純真無垢に生まれ育つてきているのだから、そう考えるのが当然だと思う。ご異議はあるだろうか。

私ごとを書くのははばかられることだが、私は昭和戦前生まれの年寄りである。園児時代は空襲に次ぐ空襲で、かの東京大空襲の夜は真っ赤になった空を見上げながら防空壕に飛び込んだ。父が戦死したり、強制疎開のために家が取り壊されたり、大波小波がつぎつぎと押し寄せた。

そして今、自分の人生を振り返ってみると、「いゝ子」ではなかった自分の姿がいろいろ

と思い起こされる。多分、はた目に私は「わるい子」だったのだろうと思う。

さらに深く考えてみると、今日の自分は、それらすべての積み重ねの中で、心身ともどうにか成長してきたということである。当然のことながら幼い日の自分は、自分が「い、子」か「わるい子」かなど、考えるはずもなかった。

心から思うようになったことなのだが、人生の歩みの中で心に浸みる体験は、数学で言う「絶対値」としての価値がある、ということである。たとえ悪い体験であっても、悪かったと認識を深めたとき、それは大いなる価値としての存在になるからだ。

「一人ひとりのその子その子として迎える」 「い、子」であろ

戦後ほどなく倉橋が書いた文章に、次のようなものがある。

「幼稚園の心得、早くいい子になれ……の、美しい、まことしやかな言葉を以て、はめこませたり、押しつけたることが常であるかもしれない。」

「子らを一束に一括したものとして迎えないで、一人ひとりのその子その子として迎えることである。一人ひとりとして迎えるからにはみんなが同じようであることを仮にも要求し注文してはならない。同じに扱わないといっただけでなく、一人ひとりをその子らしくあらしめるところに、一番大切な秘訣がある。」
〔倉橋惣三選集・第四巻〕フレールベル館 一九六七年所収「戦後小編」より

戦後に倉橋の記したこの一文は、のびのびとした筆遣いであり、彼らしい面目躍如たるものがある。「い、子」としての固定的なメジャーはなく、その子その子の個性尊重への確固とした方向が示されている。

地域で育てる

子どもたちのさまざまな
居場所を訪ねます

クロモンこども食堂

灰谷知子 (幼稚園教諭)



〔所在地〕 東京都品川区北品川
2-2-7

〔連絡先〕 電話 なし
(フェイスブックあり)

品川駅から、ゴジラが映画で初めて上陸した八ツ山橋を越えて、北品川本通り商店街に入る。かつて東海道五十三次第一番の宿場町として栄えた頃と同じ道幅で、今なお多くの人々の往来を受けとめている。クロモンカフェは、黒門横丁という路地沿いの家の二階にある。入り口では、手書きの看板が私たちの訪問を温かく受け入れてくれる。

『もしかしたら、こどもだけでばんごはんたべてる？』ひとりでチンしてたべてたり、おるすばんしてる？』ときどきだけど、よかつたらクロモンにおいで。あつたかいばんごはんをつくってまつてるよ。マンガをよんだり、しゅくだいしてもいいよ。テレビはないけど、いっしょにいるだけできつとたのしいよ。』

「クロモンこども食堂」を始めた経緯

開店前の仕込みの合間を縫って、店主の薄葉聖子さんに話を伺った。もともと会社員だ

訪問者：灰谷知子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）、上坂元絵里（同）

った薄葉さんは八年前、当時シャッターの下りる店が多く並んでいたこの地で、「品川の暮らしをもっと知ってほしい」と街の活性化を願う気持ちを胸に、クロモンカフェを始めた。こぢんまりとした間口、古く急な階段、畳敷きの居間など、民家の佇まいをそのまま利用したこの店は、当時新しく建ち始めたマンションの住人と商店街の住人とが集う場になっていった。畳の和室ということもあり、赤ちゃん連れの方も安心して足を運ぶようになってきた。



たそうだ。
そんなある日、
「こども食堂って聞いたことある？」と地域の方と話したことが転機となった。その時初めて「孤食」という言葉を知ったそう

である。子どもが親の帰宅までの時間、たった一人で留守番をする、朝作ったご飯を夜に「チン」して食べる、コンビニのご飯を買うなど。そんな社会の抱える現状を知った薄葉さんは、自分が今できる範囲でできることをしてみようと、思い立った翌日から週一程度で「クロモンこども食堂」を始めたという。

こども食堂の開店 保育所帰りの親子連れ

開店の夕方六時を過ぎると、保育所帰りの親子が「こんばんは」とつぎつぎやって来る。八畳ほどの一部屋は、あつという間に四組ほどの親子連れでいっぱいになる。「大人1、子ども2ですね」。注文をしてからは、しばしにぎやかなおしゃべりタイム。台所からはいい匂いが漂ってくる。

最初は汁物。この日のメニューは具だくさんの豚汁だった。「熱いから気をつけて」。まずは子どもたちに来たての料理が届く。「お



箸は自分で取りに行つてね」「おいしそうー」「いただきます」。親戚の家に遊びに行つたときのような言葉が交わされる。少したつと、母親たちの料理が運ばれ

る。揚げたてのアジのフライと共に「お代わりもできるからね」といううれしい一言も添えられる。

食後のくつろぐ時間に話を聞いてみた。近所の保育所からの帰り道、親子でよく利用するとのこと。「待っていれば食事が出てくるって幸せ」と話す母親の隣では、子どもたちがゆつたりと絵本を見たり、にぎやかに遊んだりしている。調理の音、匂いに満たされる穏

やかな空間の中で、時間に追われることなく過ごすひととき。子どもたちが遊ぶ傍らで、親同士がよもやま話に花を咲かせる。こんな姿を見ていると、食事というのは、決しておなかを満たすだけではないという当たり前のことに気づかされる。そして薄葉さんの話を思い出した。

「私は温かいご飯を作つて、場を開放する。このことが、子と子、親と親との伝え合いを生み、コミュニティをつくり上げていく」

こんな光景があつた。さつきまで母親に抱き上げられていた赤ちゃんが、よちよちと歩き、隣の赤ちゃんに小さなかわいい靴下を差し出す。それを受け取つた赤ちゃんが、両手で一生懸命履く。「いつもは靴下を履くのをむずがつてひと苦労なのに」と母親が話していた。ここでは赤ちゃんも赤ちゃんも出会い、かかわるうれしさを感し、自らの意思で動き始める。

小さな親子連れの多くは、午後七時を過ぎた頃、「ごちそうさまでした」「また来ます」とつぎつぎ家路に就いていった。

小学生、中学生の来店

スペースが空いてくると、頃合いを見計らったかのように小中学生の親子連れがやって来た。常連さんは、台所に程近い場所に座り、片づけや調理に忙しく手を動かす薄葉さんや食堂のスタッフの方とおしゃべりに花を咲かせる。ごく普通の家の台所と居間との距離感。お手伝いをしたがる子どもも多いそうだとはいえ、やはり危ないので、「待っててね」と声をかけるのだが、そんな何気ない会話でも、子どもたちはとてもうれしそうにするのだそうだ。

食事が運ばれてきても、名残惜しそうにゲームを続ける子どもがいた。「食事のときはおしまいよ」。優しくもきつぱりと声をかけるの

は、偶然場を共にした大人たち。赤ちゃんをあやしなから食事をする母親がいると、隣りあった子どもが「おいしいよ」と声をかけて食べさせてくれる。薄葉さんが『子どものために』と始めた趣旨を、少しずつ肌で感じ、応援する人が増え、ここで大切に行っていることをさりげなく伝える人の輪が広がってきているそうだ。

子どもが主体 居場所は自分でつくる

こども食堂で子どもたちは、食べる幸せを、匂い、音、味など、からだ全体で感じ、自らさまざまな人にかかわっている。

「こども食堂は、子どもが主体です。そうすると、子どもは自分で居場所をつくるんです」。そう話す薄葉さんの言葉には、子どもたちにかかわるすべての人や場に通ずる、大切なことが含まれていると感じた。

(二〇一六年十一月訪問)

世界にたったひとつの絵本

栗原玲子

(保育士)



いつから絵本が好きなのだろう……。思い返してみると、子どもの頃サンタクロースが毎年欠かさず枕元に絵本を贈ってくれていたからだと思います。絵本だということはわかっていても、姉と二人でわくわくしながら包みを開けていたことを思い出します。子どもの頃から絵本が大好きだったので大きくなったら難しい本もたくさん読む読書家？と思いきや、今でも絵本ばかりに夢中な私です。好きだった絵本集めは、この仕事を始めてからは自分が好きな絵本を選ぶのでなく、「子どもたちはこの絵本にどんな反応をするのだから

う……。』とあれやこれや想像しながら日々絵本選びをするようになりました。読み聞かせをしているときの子どもの真剣な瞳、キラキラと輝く瞳。読み聞かせをしているひとときは、私にとって、とても幸せな時間です。

「読む」から「作る」へ

進級してからはクラスがなかなか落ち着かず、子どもたちが何に興味を持つのだろうか……と試行錯誤の日々。そのような中、一番に子どもたちが興味を持ったもの、それが絵本・紙芝居でした。年中・年長組の混合であ

るクラスは大半が男児ということもあり、一番初めに子どもたちを夢中にさせた物語は『西遊記』の紙芝居。すぐに「ごっこ遊びが始まり、「孫悟空」「猪八戒」「沙悟浄」等の役になりきって遊んだり、「ひょうたん」や「如意棒」等の小道具を作ったり……とつぎつぎに遊びが展開していきました。

たくさんの絵本に親しみ過ぎず日々の中、「読む」から「作る」へと変わったことはとても自然な流れでした。いつの間にか、遊びの中で、自分で物語をつくる絵本作りが始まったのです。お気に入



り絵本を見ながら画用紙に模写が始まり、そこからつぎつぎとオリジナルの物語ができていきました。

『桃太郎』をアレン

ジしたR君の「パンからうまれたパン太郎」。パンが川から「こんがりこ〜こんがりこ〜」と流れてくるなんとも言えないかわいらしさの物語。大人にはない発想、あつという間にクラス中で大流行！ 他の子どもたちも、続編を考えたり、絵が苦手な子にはお絵描き上手の子が挿絵を描いてあげたりと、友達と協力しながら作っていき、つぎつぎと新しい「世界にたったひとつの絵本」が出来上がっていきました。文章は子ども言葉を一語一句変えずにそのまま文字にしていくので、ただたどしい言葉のかわいらしい文になります。子どもらしい言葉の中にも突然「そんな言葉も知っているの!？」と驚かされることもあり、一緒に作っていて本当に楽しい時間でした。絵本を作るようになってからは、自分たちが読む絵本にも、今までになかった関心が生まれていきました。「この絵本は誰が書いている

んだろう」「……」を書いた人と同じ人だ!!」
と、作者を気にするようになったのです。そ
して、作者名を気にしていくようになったこ
とで今まで以上に表紙に目を向けるようにな
った子どもたちは、表紙に書いてある題名の
「秘密」を探すように……。題名に書かれて
いる字の濁点が「ㇿ」や「☆」になっていた
り、物語に関する形になっていたりする絵本
を発見するようになりました。

「秘密」を見つけた楽しさを知ってからは絵
本を読む楽しさも増して、絵本作りもさらに
工夫するようになりました。作者からすると、
表紙は読み手へ向けた一番大事な一ページ。
絵本を自分で作るようになってから、子ども
たちも表紙や一ページ一ページに対しての思
い入れが変わったようです。

「作者」と「読者」の役割

手作りの絵本や紙芝居がたくさんできた

ので、手作り絵本だけをそ
ろえた【かぜ・だいち組図
書館】のコーナーを作りま
した。作者も読者も、どき
どきわくわく……。作者で
ある子どもたちの反応はと
いうと、自信を持って発表
する子どももいれば、読もうとすると恥ずか
しがってどこかへ行ってしまう、遠くから皆
の反応を伺う子どももいてさまざまでした。
反応はそれぞれではありますが、絵本に対し
ての思い入れが発表するたびにたくさん伝わ
ってくるので、私自身、手作り絵本を皆の前
で読み聞かせする際は、子どもたちと同じよ
うに特別な気持ちになります。

絵本はクラス全員が作っているわけでは
ありませんが、作らない子どもたちも常に「読
者」として支えてくれました。自分では作ら
ないけれど、毎日のように図書館コーナーに



行って絵本を選び、うれしそうに読んでいる姿を見ると、なんともうれしい気持ちになりました。読んでくれる友達がいるので、作者たちもさらに書く意欲が湧いているようです。「作者」と「読者」とても素敵な関係です。

魔法の時間

友達とひとつの絵本を楽しむ時間は、子どもたちにとって魔法の時間。そう感じた出来事もありました。いつものように絵本を読んでいた、みんなで大笑いした瞬間のことです。

K君が「Y君、俺たちけんかしてたのに、今一緒に笑ったら仲直りしちゃったね」と言うと、「そっだな。アハハ」とY君。『ごめんね』の言葉がなくても、楽しいことを一緒に感じて、一緒に笑って仲直り……。なんて素敵なのでしょうか！ いつの間にか仲直りしてしまっていることはよくありますが、言葉に出し

て一緒に共感しあっている子どもたちの姿がなんともほほ笑ましく、素敵だなあと感じた出来事でした。こういう瞬間は日々たくさんあるのかもしれませんが。そうやって、けんかして仲直りして仲間関係を築いているのだと思うと、あらためて子どもたちの持つている力に特別なものを感じました。魔法の時間はきっと常日頃もつとたくさんあるのでしょう。少しでもその瞬間にかかわれるよう、見逃さないように過ごしていきたいものです。

子どもの頃から大好きだった絵本。いつでも身近にあった絵本は今、子どもたちと一緒に読んで、作って、楽しむものになりました。世界にたったひとつの絵本作りはまだまだ続きそうです。次はどんな物語が誕生するのでしょうか。今日も子どもたちと一緒に絵本の時間を楽しんでいます。

レポート

こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

Vol.4 / 「食」が保育の中心にある生活

私市和子・川島雅子・佐藤瑤子



家庭的で温かみのある給食を目指して

私市和子

応答的で柔軟に対応できる給食室

こども園開設準備室メンバーは、公私立の認定こども園や保育園の視察を通して給食室の設置場所を検討しました。視察した中で印象的だったのは、二階に設置され、幼児のランチルームと一体になっている厨房です。調理師と子どもが互いに見え、応答的で柔軟に対応できる理想的な給食室でした。私たちはこの視察から、二階設置（案）を掲げました。しかし検討を重ねる中で、食材の搬入経路、面積、構造上の問題、予算の関係など問題が山積して、二階は困難であるという結論に至りました。

理想を掲げた二階給食室が変更になり、一階の廊下の奥に設置が決まっても、「見える」は譲れません。そこで、廊下の厨房出入り口をできるだけ大きなガラス戸にしました。



開園前に、
一号認定子どもと親の見学会がありました。

厨房をのぞ

き、「すごい

ね、ここで給食を作るのね」「今日食べられる？ 食べたい！」。そんな会話が聞かれ、あらためて安全でおいしい給食を提供しなければと思いました。現在は毎朝、年長の子どもたちが喫食人数表を調理室に届けて、調理師さんの包丁さばきに見ほれています。

調理は委託業者に託し、栄養士はこども園の常勤職員にすることで専門性を生かした独自の「食育」を構築することができるのと考えました。川島栄養士の採用が決定し、食器の相談をすると、川島先生は早速、サンブルを取り寄せました。それは私の考えていた器と一致し、温かみあるものでした。

食事は食べることだけでなく道具が大切な役割を果たします。テーブルは食器を置いたときに優しい音のするもの、椅子は床に子どもが着き、座る姿勢を支えられるもの、年齢によってこだわりのあるものを木夢工房にお願いしました。

心地よい生活の場をつくる

乳児期の生活は「遊ぶ」「食べる」「眠る」場が区切られていることが理想ですが、本園は一、二歳児が一つの部屋で生活しています。このような状況では、一人ひとりの生活リズムの違いを考慮するために保育者同士の話し合いや室内環境の工夫が必要となります。開園当初はなかなか話し合いの時間がとれませんでした。少しずつ共通理解を重ね、今では次のような方法が定着してきています。

遊びの後、おもちゃ棚で仕切った一歳児の室内スペースはランチルームになり、二歳児スペースは、おもちゃ棚に布を掛けて睡眠の

コーナーに。子どもの生活リズムに配慮しながら食事時間に時差をつけ、グループごとに食べることで、ゆったりと落ち着いた食事ができるようにになりました。

安心できる保育者がいて、友達と一緒に食べることの楽しさを感じているのではないのでしょうか。おなかも気持ちも満たされることで心地よい眠りへと向かいます。



おいしい「食」を提供するために

川島雅子

手作りのおいしさを引き立てる食器の選定

給食開始にあたり大切にしたいことは「食器」です。食器の選定は、園の食育に欠かせない大切な事柄です。年齢・用途別に約二十種類のサンプル品を取り寄せ、その中から園児が使う姿を想像しながら吟味して選びました。

食事の彩りが引き立つ優しい色合い、適度な重さがあり、持ったときの質感を大切にと考え、強化磁器に決めました。乳児はしっかりと食事をすくうことができるよう立ち上がりのある形、幼児は三歳と五歳では手の大きさが違うため大小二種類の箸を用意しました。

開園前試食会により調理過程の最終確認

平成二十八年三月中旬、実際にこども園の給食室を使って、昼食、おやつを調理する「試食会」を二回実施しました（食数は五十食分、

四月から勤務する調理師と行う。

献立は、お茶の水女子大学の食物栄養学科の先生、同大学附属小学校の栄養教諭の方々から助言を頂き、考案しました。心がけたのは次の二点です。

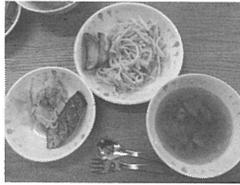
①煮る、焼く、炒める、揚げる、ゆでる、蒸すなど、さまざまな調理法を試す。

②和食など、園で取り入れたいメニューを中心にする。



【1回目の献立】

- ・ごはん
- ・コロッケ
- ・春キャベツのサラダ
- ・大根と油揚げのみそ汁



【2回目の献立】

- ・春野菜スパゲティ
- ・さわらの照り焼き
- ・切干大根とひよこ豆の
ブイヨン煮
- ・白菜とれんこんのスープ
- ・ポテトフライ

当日は、調理師と共に調理器具の使い方、盛り付け・配膳・洗浄・清掃に至る全工程を確認しました。完成した給食は、大勢の大学関係者に試食してもらい、「乳児向けとしては全体的に野菜の切り方が大きい」「コロッケの衣は卵を使っていなくてもサクツとしておいしかった」等のご意見を頂きました。

キャンパス内の自然を生かし豊かな食体験

子どもたちの心と体の健康には、旬の食材をたっぷり使った和食が大切だと考えています。

開園当初は残食の多い日もありましたが、毎日子どもたちと食事をし、楽しく食べられる雰囲気づくり、味付けや調理の工夫を重ねました。子どもたちがキャンパス内の畑で作った夏野菜での調理体験を積み重ねることで、苦手なものでも少しずつ食べられるようになってきています。最近ではレモンの木があることを知り、さつまいものレモン煮やケーキ作りにチャレンジしました。レモンは子ども

たちが収穫。誕生会のレモンケーキは「おいしかったよ。また作ってね」と大喜びでした。今後も附属小の栄養教諭や大学の先生方と連携し、大学内のこども園の特徴を生かした食育活動に励んでいきたいと考えています。



▲キャンパス内で収穫したレモン



▲こども園オリジナルの「お茶大レモンケーキ」

こども園の厨房設計にかかわって

佐藤瑠子

給食を作る、というのは子どもたちの成長を支えるだけでなく、万が一食中毒が起これ

ば命にもかかります。その土台となる厨房設計にかかわることは非常に責任の重いことでした。また、調理員の方々がけがなどせず、安全に作業できることも重要です。そのため、子どもたちと調理員の方々の安全を守る、ということを最優先事項としました。また、附属小学校の栄養教諭 足立愛美先生にもご協力いただき、相談しながら進めていきました。最初に取り組んだのは、保育園の給食を知る、ということです。こども園と小学校の給食では勝手がかなり違いますが、足立先生も私も、こども園や保育園で給食を作るという経験がありません。そのため実際の現場での調理を想像できないことが大きな問題でした。そこで文京区にお願ひし、区立保育園の厨房を見学させていただきました。どのような調理器具があれば便利なのか、料理はどのようにして子どもたちの所まで運ぶのか、といったことを一つ一つ確認していきました。細かいことですが、コンセントを設置しなければ

ばいけないことなどは、実際に見学して気づいたことでした。

あらためて子ども園の図面を前にすると、イメージ通りにいかないことが多々ありました。一番の問題はスペースです。文京区の保育園と比べると、通う園児の人数はほとんど同じなのに、厨房のスペースは二分の程度しかありません。限られたスペースを有効に活用するためには、余計な物は置かず、必要な物があるべき所に置いてあるという状態にしなければなりません。

そこで、文京区の献立を参考にして、作業動線などに問題がないかを検討しながら、コンロや冷蔵庫の配置などの検討を重ねました。設計業者の方も、上から吊棚を設置して縦の空間も生かすなど、いろいろと工夫してくださいました。その他にも、「子ども園の厨房」として優先順位の高いものは何か、ということを考えて何度も相談を重ね、最終的な案に落ち着いていきました。

今回の厨房設計では、着任する栄養士の方が決まっていなかった時点で進めなければいけなかったのがとても苦しいところでした。栄養士によってこだわるところも違いますし、子ども園では食育に力を入れるという方針があったので、実際に献立を立てる方の意見を取り入れることができないことは残念でした。ただ、使う食器や調理器具を決める段階では川島先生が着任されることが決まっていたので、少しでもご意向が反映されてよかったです。思います。

実際にできた厨房を見ても、調理のしやすさは大丈夫かしらと不安になりましたが、ベテラン調理員の方が「いい厨房だ」とおっしゃってくださいたときは、ホッとしました。毎日の給食を作り始めれば、いろいろと問題は出てくると思います。使いながら少しずつ改善していったことで、使いやすい厨房に育っていくことを願います。

保育における二人称的アプローチ①

「二人称的アプローチ」とは

佐伯胖
(大学教員)

「ドーナツ論」

私は一九九〇年頃から、「学び」や「発達」に関して「ドーナツ論」というおかしな呼び方をしている考え方を提唱してきました。

「ドーナツ論」の原型は、私がコンピューター・サイエンスとかかわっていた一九八〇年代の後半に、ハイテク機器の「使いやすさ」に関する理論として提唱したものです。機器の「人に優しい」側面（第一接面）と「有効な仕事をする」側面（第二接面）の両方の役割と両者の関連づけの重要性を強調した理論でしたが、教育関係の仕事をするようになってから、この理論は「人や子どもとのかかわり」についての理論となりました。つまり、人は「自分の身になってくれる」他者（YOU的他者）と親しみ（それが第一接面）、YOU的関係を深めることを通して、文化の実践世界に参加する（それが第二接面）ようになる、ということを図式で表したところ、その図式がドーナツに似ていたことから、「ドーナツ論」と名付けたのでした。

ところが、二〇一〇年頃に、当時勤めていた青山学院大学の同僚である高木光太郎教授から、

「佐伯さんのドーナツ論に似たことを言っている人がいるよ」と言われて、Vasudevi Reddyの著書 *How Infants Know Minds* (直訳：乳幼児はいかに心を知るか) を紹介されました。

読み始めてすぐ、この本は確かに「ドーナツ論」に似た議論をしていることがわかりました。特に、私のドーナツ論でいう「YOU的にかかわり」(第一接面)のことを、「二人称的にかかわり」と呼んでいるのです。ただ、著者のレイディさんは、その「二人称的にかかわり」について、ドーナツ論よりもはるかに深く、根源的などころを論じており、しかも、その「二人称的にかかわり」という観点から、乳幼児の心の世界がいかに多様で面白く、まさに「人間そのもの」の本質が備わっているかを、これでもか、これでもかと、興味深いエピソード付きで説明しているのです。ただ、私がレイディさんの本で感銘を受けたのは、レイディさんは「二人称的にかかわり」について、発達心理学を含む人間科学全般でいわば「標準的に」取り入れられている「三人称的にかかわり」との対決をはっきり表明している点でした。そこで私は、講演や雑誌原稿などで、レイディさんの研究を盛んに紹介していたのですが、そのことがミネルヴァ書房編集部(西吉誠さんの耳に入っただけ)から盛んに「翻訳されてはいかがですか」との誘いをかけられました。私も、この本の翻訳ならば、ドーナツ論を提唱してきた手前、この私がやるべきだと思っただけで、誰の紹介も経ずに、レイディさんのホームページから知った彼女のメールアドレスにいきなり、「翻訳させていただきます」とお願いのメールを出しました。もちろん、私自身が何者であるかについて、簡単な経歴は添えておきましたが、どうなることかと案じていましたところ、それほど間を置くこともなく、数日して快諾の返事を頂きました。翻訳作業はかなり難航でしたが、著者とは気軽に電子メールでのやりとりを重ねて、なんとか翻訳して出版したのが、『驚くべき乳幼児の心の世界―二

人称的アプローチ」から見えてくること―」（ミネルヴァ書房 二〇一五年）です。

翻訳書のタイトルが原著のタイトルを直訳したものでないということについては、レイディさんのお許しを得ています。レイディさんは、原著のタイトルは出版社が決めたタイトルで、あまり気に入ってはいなかったが、佐伯の訳書のタイトル（その英訳をお知らせした）のほうがはるかに良い、と言ってくださっています。

「二人称的アプローチ」

レイディさんによると、私たちが人と「かかわる」際に、以下の三つのかかわり方をするとしています。

1. 一人称的かかわり (First-Person Approach)
対象を「ワタシ」と同じような存在と見なす。「ワタシならどうする」を、対象にあてはめる。
2. 二人称的かかわり (Second-Person Approach)
対象を「ワタシ」と切り離さない、個人的関係にあるものとして、親密にかかわる存在と見なす。対象と、情動を含んだかかわりを持ち、固有の名前を持つ対象、対象自身が「どのようにあろうとしているか」を聴き取ろうとする。
3. 三人称的かかわり (Third-Person Approach)
対象を「ワタシ」と切り離して、個人的関係のないものとして、個人とは無関係な（モ

ノ的な) 存在と見なす。傍観者の観察から「どうすると、どうなるか」を「客観的」に対象を調べ、そこから客観的法則(ないし理論)を導出し、それで説明する。

もちろん、ここでレデイさんが大切だとするのは「二人称的かかわり」で、「ドーナツ論」で大切としてきた第一接面での「YOU的かかわり」と極めて似た考え方をしていると、私なりに解釈しているものです。それについては次回から丁寧に解説していく予定です。

ただここで、はつきりさせておきたいことは、「二人称的アプローチ」と「一人称的かかわり」の違いです。右に挙げた「二人称的かかわり」は、私たちの「目の前にいる」他者とのかかわり方の一つを指しますが、「二人称的アプローチ」というのは、「子どもと保育者のかかわりをどのように(エピソードなどで)語るか、どのように研究するか」というときに、そこに生まれていく(あるいは生まれていない)「二人称的かかわり」に最大限の注意と関心を寄せて探究する、という私たちの「知ろうとする営み」を指しております。

したがって、本「保育エッセイ」も、基本的には「二人称的アプローチ」で語っていききたいと思っております。

倉橋惣三との対話①

「根本考察」とはどんなものですか

浜口順子

(大学教員)

倉橋先生、背はあまりお高くなかったようですね。でも背筋は真つすぐでいらした。大きな講堂の壇上で講習会をされているお姿は堂々としておいでです。昭和の初め、東京女子高等師範学校附属幼稚園の園長(主事)をしていらした頃の写真。遊戯室の前のテラスで、数人の園児とままごと遊びをしている先生の、丸い眼鏡の奥では優しい目が笑っています。

唐突ですが、私の父は、先生のご長男と同じ年(一九一三年)の生まれです。最近それを知り、倉橋先生は私の「祖父」の世代なのだと思えた途端、倉橋惣三という人をこれまでよりリアルに、具体的な人として感じるようになりました。もともと私は父の遅い子でしたので、先生が亡くなられた一九五五年よりも後にこの世に生を享け、先生と同じ時間を生きたことはありません。でも倉橋先生には、ちよつと話しかければ答えてもらえそうな親近性を覚えるのです。倉橋先生の著書や論考を読みながら質問を勝手に投げかけますから、傍らにおいて私の思索を助けていたみたいです。

ちようど百年前からのメッセージ

本誌では、今号から「保育の『根本考察』にチャレンジ！」という特集を組んでいます。根本考察——倉橋先生が一貫してその重要性を説かれた言葉です。一九〇一年に『婦人と子ども』という名で創刊された本誌の編輯主幹を、先生は一九二二年（二十九歳という若さだったのですね）から、結局晩年まで四十年以上務められ、おびただしい数の論考を各時代に発表されました。現代では、そのすべてを居ながらにしてインターネットで検索して読むことができます（そんな楽して学問はできないよ、などとおっしゃるかもしれませんが）。

『幼児の教育』誌上に掲載された先生の最後の論考は、一九五五年一月号（第五十四巻第一号）の「新しい年を迎えるにあたって」ですが、おそらく体調がかなりお悪く、新しい原稿を書くことが難しかったのではないでしょう。新年号の大事な巻頭言に穴をあけることはできず、それならばと引いてきたのが、さかのぼること三十八年、一九一六年十二月号（第十六巻第十二号）の巻頭に書いた「斯くてまた暮れゆく」の文章でした。

この原稿を書いている今は二〇一六年の暮れです。奇しくもちようど百年前、「根本考察が足りない。」という一文で始まるこの論考は、三十三歳の新進気鋭の保育学研究者が世の幼児教育界の状況を憂いて、若き情熱を傾けて書いた文章、それは老いてなお記憶に深い文章だったということでしょう。

根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉の處で動いて居る。而し

て、可なり色々のことが考へられ、試みられ、部分的に究明せられるに拘はらず、竟極の決定は何時まで其のまゝに殘されて居る。——我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々々過ぎて居るのではあるまいか。時の経過は何程かづゝの進歩を積み上げてゆくには相違ない。しかし其の進歩は、餘りに氣まぐれな、無秩序な、斷片的な集積に過ぎないものであつて、そこに何等の系統的組織的進歩といふものを見ない。思へば餘りに非學問的なことではある。

思ひつきは時には非常に賢明なる眞理の發見者である。しかし又、非常に危険なる誘惑者である。思ひつきは偶然の力で吾々を其の一點に惹きつける。それだけに、全局の關係を忘れさせ、前後の關係を失はせる。それはそれだ。しかし、それは全體の中のそれだ。(中略)——我國の幼稚園教育界に、またしても此の思ひつきの多いことである。

意味の分らない模倣や雷同や。同じく意味のない反對や批難や。こんなことの繰返へしの中に我國の幼稚園教育界は、餘りに無意味に疲れて居る。風に吹きまはされて、ぐらぐらと東西南北を廻りつかれて居るのでなければ、たゞ無意味に風に逆つて疲れて居る結果は、つまり、どつちもくだらないことに倦きくして仕舞はざるを得まい。意味のない處に厭倦がある。根のない處に枯死がある。(中略)

分つて居るといふ。其の多數は、『此頃疑ひが無くなつた』人である。或は、小さい枝葉の一局部に安住停立して、そこに、幼稚園教育問題の全部を懸け、又自分の全部を懸けて居る人であつたりする。之れも一つの悟りの開き方かは知らぬ。しかし幼稚園教育を根本的に考へて居る人ではない。(後略)

——大正五年十二月十日「斯くてまた暮れゆく」(『婦人と子ども』第十六卷第十二号 p.453) から

「根本」の意味するところは？

枝葉末節な事柄はくだらないから考えても無駄だ、とおっしゃっているわけではないようですね。枝葉も光合成には欠かせない重要な部分です。しかし、根つこの関係がなければ、命を失います。私たちは、外から見えやすい枝葉だけを見て植物のことをわかったふうでいる、ということではありませんか。「根」は外から見えにくいけれど、それなしには水分も大地の滋養も吸収できず、自らを支えることもできない重要な部分。根があるから、その「木」の全体性が保たれている。もっと大きく捉えれば、その「木」が自然界との関係性につながるネットワークの拠点。「根」だとも言えます。私たちが、見えるところ、つまり枝葉のことから現実の問題を考えることは当然だけれど、根本考察によって、どこにその「根」があるのか、それがどんな「根」なのかを探究することを忘れなければ、「氣まぐれな、無秩序な、断片的な」思考とはならない、ということでしょう。つい、「思いつき」で浮かれてしまいがちな私などは猛省が必要です。それらしい理論や実践に飛びつき、その背景たる（根本たる）時代性や文化性を十分顧みようとしていないのではないか。ある言葉や研究がもてはやされると右へ倣え式なまに同じことをやりたくなり、はやりするたびに振り回されてはいないか……。

一九五五年に再録した際、新しく加えられた末尾の文章はこうでした。

「私の幼児教育に関する考えは三十年前も現在も根本的には変わっていない。基本的真理は時代の変化にかかわらず真理である。」

園文化をデザインする ①

自然の素材を生かしたおもちゃ

中村 紘子
(小学校教諭)



「生木」とは…
森からやって来たばかりの
まだ乾火燥していない
みずみずしくやわらかい
木のこです。

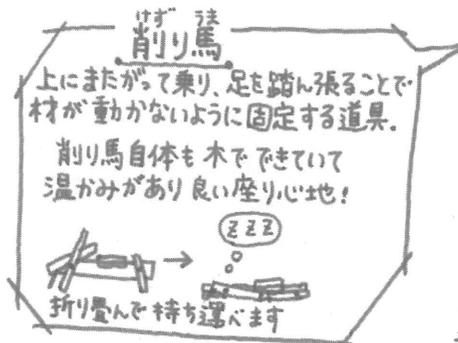
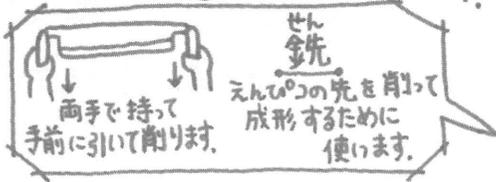
その生木に手回しドリルで
穴を開けて、矢豆になった全芯色えんぴつを
さし込みます。



園にある見えるもの、見えないもの。子どもの体いっぱい降り注ぐ、大人からのメッセージ。

中村 紘子 (なかむら ひろこ)
小学校図工科講師。森のようちえんや木育を通じた子育て支援に関心を持ち、千葉県にて木育おもちゃカフェの運営に携わる。

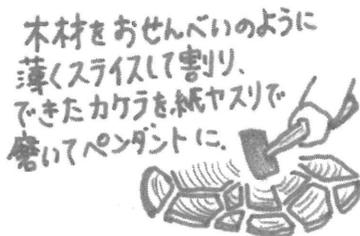
色えんぴつ作りには
こんな道具を使います!



身近な生木で電気を使わず
手工具で小物や家具を作る
スローな木工のことを
"Green Woodwork"
"グリーンウッドワーク"と呼びます。
環境にも人にも優しい
木工スタイルです。

NPO法人グリーンウッドワーク協会
<https://www.greenwoodwork.jp/>

こんなものも...
木神様のおまもりペンダント



絵本だいすき!

子どもたちと楽しむ 絵本との出会い

大田利歌子
(幼稚園教諭)



『わっしょい わっしょい
ぶんぶんぶん』
かこさとし 作・絵
(偕成社 1973年)

私の園は、自然豊かな田園地帯にあり、三歳から五歳までの園児十数名の複々式保育を行っています。本園のある山口市では「日本一、本を読むまち」を目指した取り組みを進めており、本園では、たくさんの絵本に触れ、さまざまなことを感じ、イメージし、一人ひとりの興味を膨らませるきっかけになるように、絵本カードの取り組みを行っています。

最初は、絵本の貸し出しからです。家庭に絵本があまりなかったり、お家の方が読み聞かせをすることがほとんどないというのが私の園の現状でしたので、家庭でも絵本を読んでもほしいと考え、週に一回二冊の貸し出しを始めました。一冊は子ども自身が選び、もう一冊はお家の人が子どもに読んであげたい絵本を選んでもらうことにしました。お家の人の温かい生の言葉で耳にするお話やその時間が、子どもたちには一番うれいし大切なことを、折に触れ伝えました。

貸し出しが進むと、保護者の方から、かわいらしい挿絵ものや、考えさせられる奥の深い内容のものなどさまざまな絵本の中から、どんな絵本を選んだらよいのか迷ってしまうという声がたびたび聞こえるようになりました。そこで、読んだ絵本の中で、気に入ったもの、子どもが喜んだもの、心に残ったものなどがあれば、互いに知らせあえるよう、「わ

たしのおすすめ絵本」というカードを作ることにしました。カードには、絵本のタイトル、作者、読んで感じたことを自由に書いていただくコメント欄を作りました。そして、カードを読んで共感したり興味を持ったときには『いいね』のスタンプを押してもらうことにしました。携帯のラインやブログなどで『いいね』スタンプを押すのがとてもはやってるので、若いお母さんたちには共感するという気持ちの表現や行為としてピッタリなのではないかと思ひ、カードに取り入れることにしたのです。『いいね』のスタンプは、園長先生が、「ここは私の出番かしらね」と、手先の器用さを生かして作ってくださいました。最初は保護者の方もスタンプを押すのに遠慮気味でしたが、押すほうも押ししてもらったほうもうれしい気持ちになると、とても喜ばれている姿が見られるようになりました。

お母さんからのお薦めのコメント欄には、

自分の幼い頃を懐かしんだり、読んで感じたりしたことなどが書かれており、それを参考に絵本を借りて帰られるお母さんが増え、「お薦めされてある絵本は全部読んでみたいと思います」と、絵本を借りるのを楽しみにされるようにもなっています。

また、子どもたちには、絵本の返却のときに、読んでもらった感想を聞くようにしました。「寝るときに読んでもらったの」「お母さんがこれ読むとき、わざと怖い声で読んで面白かった」などと話をしてくれて、読み聞かせしてもらったときの様子が伝わってきました。また「ポケットから鳥が出てきてびっくりしたよ」「コンテストの練習をしているところが面白かったよ」などといった絵本の感想も聞かれるようになっていきます。それから「この本、みんなに紹介してあげたい」「この本は僕のおすすめ絵本です」と言って友達に紹介してくれた子どももいます。「おすすめ絵本」

という言葉を子どもが使ったときには驚いてしまいました。が、保護者に向けた取り組みが、いつの間にか子どもたちにも浸透していることをうれしく感じました。

降園前の絵本の読み聞かせも、子どもが紹介したい絵本があるときには、紹介してもらってから読むことにしました。友達が紹介した絵本は反応が大きく、「僕もこの本が好きになった」などという言葉や、「この絵本借りて帰るよ」「あ、僕がおすすめした絵本だ」とうれしそうに子ども同士で会話する姿も見られ、友達から共感してもらうことがうれしく、自信につながっているのではないかと感じています。

私のお薦めする絵本は、かこさとしさんの『おはなしのほん』シリーズ（偕成社）です。自分の子どもの頃に母親に何度も読んでもらったもので、話の面白さに加え、挿絵の表情

や動きが緻密に描かれていて、隅々まで見て楽しんだことを思い出します。子どもたちにもその楽しさを伝えたいと思い、園でもかこさとしさんの絵本をたくさん読んでいます。

このシリーズの中に『わっしょい わっしょい ぶんぶんぶん』があります。音楽が大好きな人々が、それをうらやむ雲の上に住むアクマの嫌がらせに対し、皆で知恵を出しながら前向きに解決し、最後にはより一層音楽を楽しむながら暮らしていくという楽しい話です。この絵本が子どもとつながって遊びとして発展したエピソードを紹介したいと思います。

昨年の運動会では、エンディングにカーニバルを楽しみました。それから、廃材を打ち鳴らしたり、組み合わせさせてギターや太鼓、カスタネットなど、楽器作りが始まりました。できた楽器は友達に見せたり、音を聞かせたり、「それ、面白い形だね」「僕のは、ちょっと音が違う」と興味も広がって、作り方を

紹介したりもするようになり、まさに絵本の
中のようなへちよっとへんなかつこうのが
つきがたくさん出来上がりしました。そんな
とき、子どもたちに『わっしょいわっしょい
ぶんぶんぶん』を読み聞かせました。「私たち
とおなじだね」と言ったり、楽器を盗む場
面では「絶対また取りに来るよ」と話したり
など、絵本の楽しさを感じている様子が、子
どもたちの姿から伝わってきました。

そんな中、「私たちの楽器も取られたらどう
する？」とYちゃんが言い始めると、「もしか
したら、アクマが見てるかもね」など、子ど
もたちがワクワクした表情で、現実と絵本の
世界をつないで話すようになりました。そこ
で私は、絵本に出てきたアクマのくもの巣に
見立て、天井に楽器を吊るしておきました。
すると「あれ？ 楽器がない！」「アクマが取
ったんじゃない？」「どうにかして取り返そう
ぜ」といった絵本の登場人物さながらの言葉

や、「歌を歌う」「風をお
こして吹き飛ばす」「網で
取る」「積み木で階段を作
る」「トランポリンで跳ん
で取る」の五つの作戦が
できてきました。

子どもたちの作戦は、
なかなかうまくいきませんでした、長い虫
捕り網を使って楽器を取り戻すことができ
たときは、「取れた！ やったね！」と大喜び。
イメージや目的が共有され、とても楽しい遊
びの一つになりました。

このエピソードのように、絵本を通して子
どもはイメージを広げ、たくさんのことを感
じていくのだと思います。園の子どもたちと
保護者の方と一緒に、これからも「わたしの
おすすめ絵本」カードを活用し、お話の楽し
さを広げるとともに、たくさんの絵本との出
会いを大切にしていきたいと思えます。



from:

林志妍
(大学院生)



韓国から見た日本の保育

韓国人留学生の私には、韓国人の保育者と共に日本の保育現場を訪れる機会がしばしばある。そのおかげで私は、日本の保育を見た韓国の保育者たちの反応や感想を近くで聞くことができる。私の見ている限り、韓国の保育者は、日本の保育から多かれ少なかれ強い印象を受ける。そして、その感想は私に日本の保育の魅力をあらためて感じさせてくれる。

本稿では、この数年間に日本の保育現場を訪れた韓国人保育者の典型的な感想を伝えたい。特にここでは、昨年七月、東京、埼玉の保育園を見学した保育者の方々の声を拾ってみた。なお、私が同行した韓国の研修団は「韓国生態幼児教育学会」が主催した研修団であり、二十年近く毎年日本の保育現場を訪問し続けてきたグループである。この研修団では特に自然とのかかわりと遊びを重視する保育園・幼稚園を選び、見学を行うのが特徴である。当然、研修団にも自然や遊びを重視する

林志妍 (いむじよん)

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻 保育・児童学コース博士後期課程。日韓の保育の比較と学び合いの可能性に関心を持っている。

保育観を持つ保育者が多く参加している。そのため、本稿の中で扱う日本の保育現場が日本の典型でもなければ、ここでの感想が韓国人保育者を代表するものでもないことをあらかじめ述べておきたい。

子どもの遊びに最適な環境

見学施設に入ると、韓国の保育者はたいはい、「わー」と歓声を発する。広い園庭、保育室からすぐ園庭に出られる開かれた環境、広い砂場と土山、子どもたちが登れる木などは、韓国の保育者の目を引きつけるようだ。

アン園長は、何年も前に日本の幼稚園で見た、木にぶら下がっているブランコをいまだに覚えていた。「大人二人がやっと抱えるくらいの大きくて高い木にブランコがぶら下がっていました。子どもたちは自分の背よりもずいぶん高い所までブランコをこいでいました。とても危険だと思って衝撃を受けながらも、

こうすると子どもたちは本当に楽しく遊べるだろうと思いました」

そして必ずと言っていいほど韓国の保育者たちの目を引くのは、土山の上で遊ぶ、はだしの子どもの姿だ。今回が二度目の研修だというパク先生は、日本ではだして遊ぶ子どもたちを見てとても楽しそうと思つて、自分の園でもはだして遊ぶことを取り入れたそうだ。

「私の園でも）冬なのにまだはだして遊ぶ子どもたちがいます」。見学先の子どもたちと交じってはだしになり、土山から滑り下りながらパク先生は言った。アン園長も、土山はぜひ自分の園につくりたい環境だけれども、現実的には実現するのが困難だと残念そうに言った。

研修団によるアンケート調査では、研修参加者にとつて最も印象的だったのは「園庭に面して直接出入りできる保育室の空間構造」だったらしい。確かに、保育室から屋外の遊び場までの子どもの動線を短くした日本のよ

うな建物の構造は、韓国では見かけにくい。

自由で自立した日本の子ども

韓国の保育者たちは、二〜三時間の短い見学ですれ違った子どもたちの姿を鮮明に覚えていた。そしてその姿は、韓国の子どもの姿とは異なっている。

「一人で園庭の端まで行って戻ってきた子がいましたよ。(韓国では)子ども一人で(大人のいない)園庭の端まで行けないでしょう。私たちは子どもを監督しなければならぬから。なのにその子は平気で一人で何かを済ませて、保育室に戻ってきました」。日本の保育者を見るのは初めてのパク園長は、ただ一人で園庭の隅で遊びに集中している子どもを見て感激していた。その姿から、保育者の過剰な保護を受けず、のびのびと自然に育つ子どもの姿を見たようだ。

「(子どもは)保育者がある程度ケアしてあげ

ないといけないと思っていました、それが全部崩れました。子どもは(水遊びの後)自分で下着をはき、体を拭いていました。保育者も、手伝おうか? と聞く気がまったく見えませんでした」。今年四年目の幼稚園教諭のキム先生は、不思議そうに語っていた。

韓国の保育者は共通して、見学先の子どもが自分の園児より、自由で自立していると語る。二歳くらいの子がゆつくりと服を着たり畳んだりする姿、テーブルを拭いたり片づけをする姿に驚く。水をいっぱいためたバケツを持ってヨチヨチ歩く子どもを見て、水がこぼれそうなので助けようとしたら、周りの日本人保育者が平気でその姿を見ているので手伝うのをやめたという幼稚園の先生もいた。

子どもと遊ぶ日本の保育者

韓国の保育者たちにもう一つの強い印象を残すのは、彼らを迎える見学先の保育者の態

度だと思う。見学者を意識して特別なことを見せようとする様子も、逆に隠そうとする様子もない。ただ普段の保育の姿をわれわれ見学者に公開するだけ。それで、韓国の見学者は、子どもと遊んだり食事をしたりする日本の保育者の本当の生活に触れることができる。

韓国の保育者は、その保育者の生活の中でも、子どもと遊ぶ姿を最も印象的に感じていた。「(見学先の保育者たちは)とても幸せそうに、とても自由に子どもたちと遊んでいます。保育者は泥団子を作り、その中で楽しんで遊んでいました。私たちは腕を組んで子どもを見張っているんじゃないですか……」。何年前かのインタビューで幼稚園教諭のり先生がうらやましげに言っていた。研修後に会ったある保育者は、園に戻って日本の保育者のように子どもと楽しく遊ぼうとしたが、やらなければならぬ仕事のことがつぎつぎ頭に浮かび、遊ぶ余裕を持てなかつたとつぶや

いていた。私は、日本の保育者の姿が韓国人保育者の心に、子どもとの楽しい遊び、幸せな時間への強い願いを呼び起こしている気がする。

日韓の保育の「違い」をみる

韓国の保育者が長年日本の保育を訪ね続ける理由は何だろう。韓国の保育者一人ひとり、日本の保育現場についてそれぞれ違う面に注目するが、彼らは共通して言う。「ここで遊ぶ子どもたちは本当に楽しそう！ 幸せそう！」。木登りであれ、土山であれ、子どもたちと遊ぶ保育者の姿であれ、韓国の保育者が注目するのは、韓国でも実現したい、子どもを幸せにする環境だった。幸せな子どもの表情に日韓の変わりはなく、保育者であればそれが感じ取れる。そして、そのような環境をつくってあげたいという思いも日韓とも一緒ではないか。私はこれが毎年韓国の保育者が日本を訪れる理由だと思う。

保育はみんなでつくるもの

—ある日の登園から—

西隆太郎

(大学教員)

娘の遥は、保育園の二歳児クラスに通っている。平日たまに時間がとれたときは、私も遥を保育園に連れていく。普段は仕事で保育園にお邪魔することも多いが、保護者として園を訪れるときにも、あらためて保育の大事なことを感じさせられるように思う。

ある冬の日。まだ家で遊びたそうな遥を、抱っこで誘う。靴を履き、手をひいて扉を開けると、外には雪がちらほらと舞っている。

「見て！ 雪だよ」

「うん！ ゆーきー！」

その一瞬で遥の気持ちも高まり、にこにこと一緒に歩いていく。

いつもの曲がり角には、おじいさんが佇み、「おはようさん」と満面の笑顔で声をかけてくださる。

「おはようございます！ はるちゃん、おはようって」

照れてしまつてなかなか言えないようだったが、きつとうれしかったに違いない。いつもこの角で道行く人を見守ってくれているおじいさんだが、どれだけかこの街を支えてくれているだろう、と思う。

保育園は幸運にも家の近所で、歩いて通いやすい距離にある。通りを渡ってお地藏さんに挨拶すると、そこからはもうすぐだ。

二歳児クラスへと向かって廊下を歩くと、「あ、はるちゃん来た！ はるちゃん来た！」と、ぴよんぴよんはしゃいでくれる女の子。

先生方は子どもたちとかかわりつつも、私たちを笑顔で迎えてくださる。私が服を用意したり、一日の支度を始めると、背中に「どーん！」と遙が乗っかって甘える。すると、廊下の向こうから男の子が一直線にやって来て、遙の周りをくるくる駆けて、まるで飛行機が急旋回するように、廊下の向こうへ飛んでいく。向こうへ行ったかと思うとまた駆けてきて、遙を軌道の中心のようにして、楽しげな笑顔で何度も大きな弧を描く。その子に「おはよう」と声をかけたところで「おはよう」と型通りに言葉で返すわけではないが、それ以上私たちを歓迎してくれているのだと思う。

先生がギターを手にして歌い始めた。それが聞こえてくるなり、遙はすつと私のそばを離れ、椅子に座ってみんなと一緒に聴き始めた。以前のようにもうちよつと私に甘えていてほしかった気もするが、このごろはこんな様子も出てきたように思う。

もちろん保育園の朝はにぎやかで、こんなひとときも、いろんなことが目まぐるしく行き交い、子どもたちと入れ替わり立ち替わり出会う中で、生まれているのである。今日のように、ボタンの掛け違えもなく、うれしいことがとんとん拍子に積み重なっていく日もあるが、そうでもないことも数多くある。それこそ、遙がコートのボタンを一番上から一番下まできっちり自分で留めたいのになかなかうまくいかなくて……といったことが重なり、ぐずぐずすることもある。

準備を終えると、私も保育園を出ていくことになるが、廊下でそっけなく別れるよりは、遙の手をとっていったん部屋の中に入っていくことが多い。朝、みんなが自由に遊んでいる中にすんなり入っていく子もいると思うが、遙の場合は、少しゆっくりと自分なりに様子を見てから、ということも多いように思う。

ふと気づくと、遙が絵本のコーナーで、M君と寄り添って静かに絵本を読んでいる。隣同士落ち着いた安心感が漂う中に、男親としては、M君、迎えてくれてありがとう、という気持ちもあれば、どこかしら複雑な気持ちにもなるのだが……。

去り際が難しく、なかなか私の腕を離れないときもある。先生はみんなの遊びの中に入りながらも、私たちの様子をよく見てくれていて、ちょうどいい頃合いを見てそっと手を伸ばしてくれる。先生に一对一で抱っこされ、昨日のことなど話しながら、遙も少しずつ安

心して園での生活に入っていく。私も、先生が遙を優しく抱きとめてくださったことで、「はるちゃん、行ってくるよ」と言える。

私たちばかりでなく、どの子も、どの保護者も、一つ一つ心動かされながら、新しい一日へと向かっていく。登園のひとときは、そんな時間である。

登園時の保育を考えると、挨拶を習慣づけるとか、的確な言葉掛けで保育に導入していくとか、そんな保育士の「専門性」や「スキル」が語られることも多いようだ。保育の実際がそう絵に描いたように進むとはとても思えないが、日常の一つ一つのことが大事だということだろう。ただ、「保育の対象」というよりも、人としての私たちにとっては、登園はそれ以上の意味を持っている。

ある一日、その子が世界に受け入れられていく時間。その子自身も、その日の世界を自

分の心の中に受け入れていく時間。短い時間ではあるけれど、子どもにとって世界への信頼は、こんな積み重ねからも築かれていくのだと感じられる。

その過程には、地域の人々も、共に育つ子どもたちも、かかわってくれている。誰か一人の大人が思いのままにコントロールするような体験ではない。保育はみんなで作るものだと思う。扉を開けて見つけた雪が心を明るくするように、思いがけない自然の変化も力になってくれる。大人があれこれ考えて言葉をかけるより、自然は一瞬で子どもたちの気持ちを更新してくれる。

時間も保育の味方になってくれる。今日、いろいろなうれしいことが重なったのは、ただの偶然というだけではなく、日々ここに通ってきた歳月や、冬になってクラスが成熟してきたことや、遥自身が大きくなってきたことなど、これまで過ごしてきた時間が与え

てくれたものでもあるだろう。その時間は、ずっと通ってきた保育園と先生方によって支えられてきた。友達が温かく迎えてくれるのも、クラス全体、園全体が支えられているからだと思う。大好きな先生と一緒に過ごした一年、一人ひとりを大切に見てくださった一年がある。保育はみんなで作るものだったのが、みんなの力が生きるように支えているのが、保育園であり、どの子のことも優しく受けとめてくださった先生方なのだと思う。

四月には、この乳児棟を卒業し、お隣にある幼児棟に移ることになる。行く手はるかな人生にとって、小さくて大きな一コマだ。新しいクラスに入って、私たちの心も今まで以上に動かされることと思うが、みんなで育ちゆく時間の中で、きつとこんなふうに幸せな場所になっていくのだろうと思う。

学生が「就学前の乳幼児の成育環境デザイン」を考え抜いた八日間

渡辺隼伍
(大学生)

私たちは学生団体GEIL（ガイル）と申します。一九九九年の創設から、東大・早慶等の学生を中心に、社会人の方々にもご協力いただきながら、毎年「学生のための政策立案コンテスト」を開催してまいりました。そして二〇一六年は、「就学前の乳幼児の成育環境デザイン」という社会問題をテーマに掲げ、コンテストを開催しました。

学生団体GEILについて

「社会を創る担い手の育成を目指す」

私たちは、若者の政治や社会問題への無関心が指摘される現状に対して、学生に政策立案

案の場を提供し、政策と社会問題への理解を深めてもらいたいと考えています。政策は社会問題の解決策であるとともに、この先の日本を形作るものです。だからこそ、これからの社会を担う学生が、政策を理解し、社会的なしがらみにとらわれず将来をデザインする政策立案プロセスが必要であると考えます。

学生が政策立案を体験できる場として、政策立案コンテストを毎年夏に開催しています。そこでは、参加者を初対面のチームに分け、コンサルティング等を取り入れることにより、価値観の異なる他者と課題を解決させる困難さを体験しながら、より良い政策の立案

渡辺隼伍（わたなべ しゅんご）

東京大学在学。学生団体 GEIL。法学部進学内定ですが、現在は教養学部ということもあり、勉強は専門を絞らず、政治学、哲学、教育等に関心を持っています。

を目指してもらいます。

「就学前の乳幼児の成育環境デザイン」 について～その必要性

私たちがなぜ「就学前の乳幼児の成育環境デザイン」の問題を扱うことになったか、説明したいと思います。

今年の学生団体G E I Lは、社会問題の中でも、「教育」に関心を持っていました。そこで「教育における社会問題は何か」と考えたとき、現行の教育制度では非認知能力の涵養が不足している、ということが重要な課題として浮かび上がりました。非認知能力とは、主体性や意欲、協調性や忍耐力、自尊心……といった、学習や生活、仕事の生涯の基盤となるような能力のことを指しますが、この非認知能力を培うのに最も重要な時期が、就学前です。

ノーベル経済学賞受賞のジェームズ・ヘッ

クマン教授の研究などによった考えですが、就学前の子どもは身体的・知的・情緒的発達が人生の中で特に著しい時期にあります。就学前に非認知能力の養成に重点を置いて育てられた子どもは、そうでない子どもに比べ、将来の学力検査の成績が良く、特別支援教育の対象者が少なく、収入が多く、生活保護受給率や逮捕者率は低い、という統計も同教授により提出されました。就学前の成育に政策的投資を行うほうが、全体としての社会的コストは低く済むことを実証し、世界的に波紋を起しました。個人の幸福にとってもそのほうが望ましいのは言うまでもありません。これらの点から、私たちはまず、今回のコンテストの課題で対象とする年代を「就学前」としました。

そして、子どもの非認知能力の養成には、その保護者との関係が欠かせません。特に、人が生後数か月の間に特定の人（母親や父親

等)との間に結ぶ情愛的な絆は「アタッチメント」(愛着関係)と呼ばれ、しかるべき時期にこれを形成できるかどうか、その後の非認知能力養成の鍵となります。

一方で、幼児期は義務教育期間ではなく、その成育の質は家庭環境や親の子育てへの関与のし方によって左右されやすいと言えます。幼稚園、習い事に通う……など、教育熱心な親のもとで心身共に健全に育っていく子どもが多い一方で、そうでない事例もたくさんあります。虐待、ネグレクト、不慮の事故による親の喪失、など……。子どもたちは親を選ぶことはできず、常に「弱者」の立場に置かれます。となれば、どんな家庭に育とうとも、その子どもたちの発達が保障されるような成育環境を整備することは、社会側の責務であると考えます。

就学以降の非認知能力涵養といった教育的目標を達成するためには、そもそも乳幼児期

における土台作りが必要なのです。したがって、コンテストの課題を検討する上でも、乳幼児期の子ども発達を保障していくことに重点を置きました。

現在日本では、すべての乳幼児の発達が健全に保障されているとは到底言えません。虐待は愛着形成を阻害しますが、その報道は絶えません。また、虐待や親の不在等により親から離れざるを得ない、いわゆる要保護児童の養護の環境として、里親委託の割合が低く、大規模施設の割合が多いことも問題です。

以上を踏まえ、今回の政策立案の課題は、「就学前の子どもが、不適切な養育により生命を脅かされず、健全に発達を遂げることを保障する環境を整備する政策を立案せよ」と設定しました。

コンテストの成果〜学生が考えたこと

コンテストは七泊八日にわたり開催され、

全国から集まった八十名の大学生・大学院生が知恵を絞ります。

コンテストの企画段階において私たちは、どうすれば、多くの学生にとってその当事者であることはおろかそれまで目を向けたこともない虐待や養護等の問題について理解を深め、良質な解決策を考えられるだろうか、と議論を重ねました。そこでコンテストでは、参加者に問題の実態をより確実に知ってもらうために、インターネット等机上で簡単に得られる二次情報だけでなく、より本質的な情報、特に一次情報を提供することにしました。すなわち、参加者が会場から飛び出し、官庁を訪問し、施設に見学に行き、問題の当事者や第一人者にお話を伺うことができる機会を積極的に設け、関連する書籍も会場に豊富に用意しました。

これにより二つの成果が上がりました。一つは、こうした機会にリアルな情報（虐待が

起こった家庭の詳細な情報や、問題に直接かかわっている方から聞く話など）に触れた学生たちが、机上で得た知識の具体的なイメージを持つことができ、それが刺激となり問題解決への意欲を高めたことでした。参加者は口々に「子どもの問題はもともとそれほど関心が高くなかったが、話を聴くにつれて、必ず解決しなくてはならない問題だと思うようになった」「詳しく虐待の事例を知ると、痛ましさで涙がこぼれそうになった」と話しました。

もう一つの成果は、リアルな情報に触れることで、より良い政策を立案するのに重要なヒントが得られたことです。例えば、虐待家庭には高確率で経済的な貧困が併発していることが明らかになっています。しかし、だからといって、貧困家庭にお金を給付すれば貧困から脱却し虐待は一樣に減る、などと考えるのは誤りです。なぜなら、そうしたところで、お金は親の遊びに費やされ、子どもへの

虐待は一向に減らない、という帰結が考えられるからです。これでは解決になりません。すなわち、虐待が起る要因は経済的な苦境だけでなく、親が精神疾患を抱えていることや、地域から孤立していること、などさまざまあり、各要因が重なっているのです。それを無視して、一枚岩的な政策により問題が解決されると考えてはならない。このことは参加した学生にとって、専門家のお話を聴くうちにだんだんと気づいていくことでした。

最後に、コンテストにおいて最優秀政策案に選ばれた政策案を簡単に紹介したいと思います。この政策案は二つのパッケージから成り、一つは「地域まるっとネットワーク」の構築です。虐待のリスク要因の多くは根本的には社会的孤立であるから、家庭と行政のつながりが必要だと考えました。そこで、行政とのつながりを持たない子ども（あらかじめ

行政がリストアップ）を市町村単位の「地域まるっとネットワーク」によって捕捉する体制を構築します。これは水道局や運送業者など公共性の高い法人から成る連携機関であり、市町村はこのネットワークに、つながりのない家庭の居住実態の調査や児童相談所ダイヤル「189」の広報などを依頼します。

もう一つが、里親移行時の親権留保です。要保護児童は、愛着形成の観点から、里親委託が望ましいのですが、しかし、要保護児童の施設入所が長期化しています。里親委託の障壁になっているのが実親の拒否です。そこで、児童福祉法を改正し、条件付きで、実親の同意なく里親委託への移行を認めます。

コンテストで立案されたすべての政策案は、塩崎恭久厚生労働大臣にお渡しすることができました。子どもに関する政策が正しい方向に進むことを願っております。

ひろば

便利
POST

◆私の「カルチャー・いんぷお」◆

◆映画『ブルックリン』（ジョン・クローリー監督 2015年 アイルランド・イギリス・カナダ合作）。アイルランドで母と姉とで暮らす主人公アイリッシュは若い女性らしく都会の生活に憧れ、知人を頼ってニューヨークに働きながら苦学して資格を取り、前向きに都会での生活を謳歌します。ところが姉が急な病で亡くなります。彼女は大好きな恋人の手を振り切って故郷に残された母の元に駆けつけ、母を慰めます。一昨年母を亡くした私には印象に残る作品でした。

◆昨年7月に起こった神奈川県相模原市の障害者施設での殺人事件のニュース解説で熊谷晋一郎氏を知りました。脳性まひの身体障害を持つ彼は、小児科の医師で、障害者の当事者研究者です。『リハビリの夜』（医学書院 2009年）では、自らの幼少時代のリハビリを分析しています。夏に参加した子どもリハビリキャンプを「施設につくと私の体は車いすから降ろされて、毛足の短いマットが敷かれたひんやりと冷たい床の上に置かれる。私と世界とのあいだに入って、さまざまなモノとの関わりを媒介してくれていた車いすがなくなり、私の体は床や、床から数センチ以内にあるモノという限られた範囲とのあいだにしかつながりをもたなくなる。それまで関わりを持っていた本棚や机は頭上はるか高いところに行く。私はまた『二次元の世界』に舞い戻るような感覚になった。」と書いています。

◆最後に新しい映画『はじまりへの旅』（マツ・ロス監督 2016年 アメリカ）が4月1日公開予定です。米国北西部の深い森に暮らすユニークな家族の旅物語です。キャッチフレーズは「普通ってなんですか?」です。

（東京都八王子市在住 AK）

◆お茶の水女子大学附属幼稚園が創立140周年を迎えました◆

明治9（1876）年11月16日、日本最初の官立幼稚園として東京女子師範学校附属幼稚園が誕生してから140年の月日が流れました。節目にあたって、140年の歩みを記念誌にまとめるとともに、昨年11月26日、お茶の水女子大学の講堂で140周年記念式典を開催いたしました。また、12月17日には、創立140周年記念シンポジウム「幼児教育の過去・現在・未来」も開催いたしました。榊原洋一氏による基調講演「世界の中の日本の幼児教育」に続き、大戸美也子、浜口順子、伊集院理子、堀越紀香各氏から報告がありました。盛りだくさんの内容で最後のパネルディスカッションの時間がほとんどとれない状況でした。

お茶の水女子大学附属幼稚園創立140周年記念誌および記念シンポジウムの資料にご興味をお持ちの方は、以下のアドレスにお問い合わせください。

ochayou@cc.ocha.ac.jp

日本保育学会第70回大会のお知らせ 「あらゆる子どもに保育を」

会期：2017年5月20日（土）、21日（日）
会場：川崎医療福祉大学・川崎医科大学・川崎医療短期大学（岡山県倉敷市）

倉橋惣三先生の下、東京女子高等師範学校附属幼稚園で第1回日本保育学会が開催されたから節目となる第70回大会を、岡山県で開催できることを光栄に思い、皆様のご参加を心からお待ちしております。（第70回大会HP、実行委員長挨拶より）

<http://hoiku70.jp/>



編集後記

新年度を迎える4月。毎年この時期になると、初めて担任を受け持ったときのことを思い出します。子どもたちとの出会いを楽しみに思う一方で、新しく始まる生活に緊張や不安のほうが大きくなっていました。それでも、初めて子どもたちと顔を合わせる入園式の日には、笑顔で出たい！ と気持ちが引き締まったことを今でも覚えています。今年はどうなる1年になるでしょうか。新しい始まりにドキドキしながら、でも期待に胸を膨らませてやって来る子どもたちの生き生きと遊ぶ姿や笑い声が園にあふれることを願っています。

さて、今年度の『幼児の教育』は、「子ども学の源流を次世代につなぐ」という思いは変わらぬまま、特集を一新しました。「保育の『根本考察』にチャレンジ！」と題して、今号は85年前と同じ「いい子」をテーマに座談会を行いました。当時の子どもたち

や先生方の姿に思いをはせながら「いい子」を語る中で、時代は違っても、変わらない保育者のまなざしがあるように感じました。「私はこう読む」では、荒井 洸先生がさまざまな視点から「いい子」を語られるだけでなく、振り返って思う「わるい子だった自分」について語られていることも興味深いもので

す。地域の子どもたちの居場所や、海外から見た日本の保育の報告。自分の好きな絵本や、手作りのおもちゃなどの紹介。佐伯 胖先生による「二人称的アプローチ」の連載、と新しいコーナーも始まりました。子どもにかかわる多くの人、場所、もの、そして読者の皆様とつながり、116年目を迎えた『幼児の教育』。お読みいただき、ぜひご意見やご感想などをお寄せください。今年度もどうぞよろしく願いいたします。(IR)

次号予告 幼児の教育 夏号 2017年6月刊行予定

新企画、新連載が好評！ 充実した内容でお届けします。

特 集 保育の「根本考察」にチャレンジ！ 2
「幼稚園でしていること - 観察いろいろ -」 江波 諄子氏ほか

文 化 バリアフリー絵本について 攪上久子氏

報 告 お茶の水女子大学附属幼稚園創立140周年記念シンポジウム報告
～ 榭原洋一氏の講演から

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 春号 第116巻 第2号

平成29年4月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発 売 所／株式会社フレーベル館
電 話：03-5395-6604 (編集)
振 替 00190-2-19640
印 刷 所／図書印刷株式会社
定 価／本体880円＋税
©日本幼稚園協会 2017 Printed in Japan

編 集 委 員／伊集院理子
伊藤綾子
菊地知子
佐藤寛子
編 集 協 力／フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●



保育ナビブック ※ 第3弾!

※保育ナビ(月刊保育誌)から生まれた新シリーズ。
保育現場で気になるテーマをしっかりと掘り下げます。

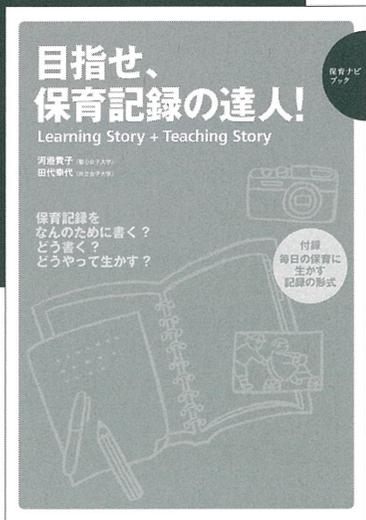
目指せ、 保育記録の達人!

Learning Story + Teaching Story

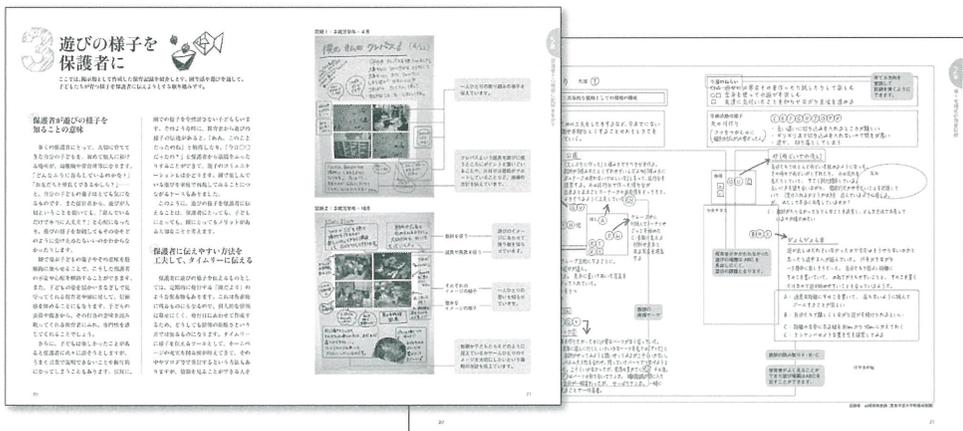
保育記録は、子ども理解を深め、同僚や保護者と子どもについて語り合うためのツールです。保育者の専門性を高め、質の高い保育実践を行うための記録の書き方を提案します。

共著：河邊貴子(聖心女子大学) 田代幸代(共立女子大学)

全 80 ページ 26×18cm
定価 本体 1,800 円+税
109-54 ISBN978-4-577-81405-5



シーンに適した様々な保育記録の書き方と活用の仕方がわかる!



※画像は見本です。変更になる場合があります。

CONTENTS

- 第1章 保育者の専門性と保育記録
- 第2章 様々な様式の保育記録

- 第3章 保育実践に記録を生かす
- 第4章 園内研修に記録を生かす
- 第5章 保護者との連携に記録を生かす

心をとめて 森を歩く

写真とことば：小西貴士

文：河邊貴子

森に心をとめてきた人と
子どもに心をとめてきた人
ふたりが織りなす
珠玉のフォトエッセイ

心をとめて 森を歩く

小西貴士
河邊貴子

フレーベル館

全 104 ページ 20×14cm
定価 本体 1,800 円+税
109-64 ISBN978-4-577-81408-6



<目次より>

写真とことば 小西貴士

- うれしい日
- LOVE & PEACE
- 芽吹きやささやき
- 笑っちゃうな
- お疲れさま
- ……ほか 34 編

文 河邊貴子

- 心をとめる
- 心の可動域
- 心がとまる
- 豊かな心はどこから
- 心をこめる
- 心をとめてもらうこと

「ていねいに
歩くことで
それが
ただひとつの
切符です」

(本文より)

定価 本体八八〇円+税

キダーブックの **フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支店・営業所
または本社保育営業部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。